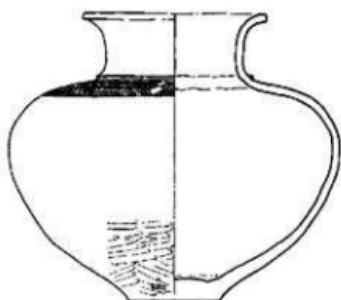


H I E  
比 恵 遺 跡 群 (12)

—比恵遺跡群第37次・39次発掘調査報告書—



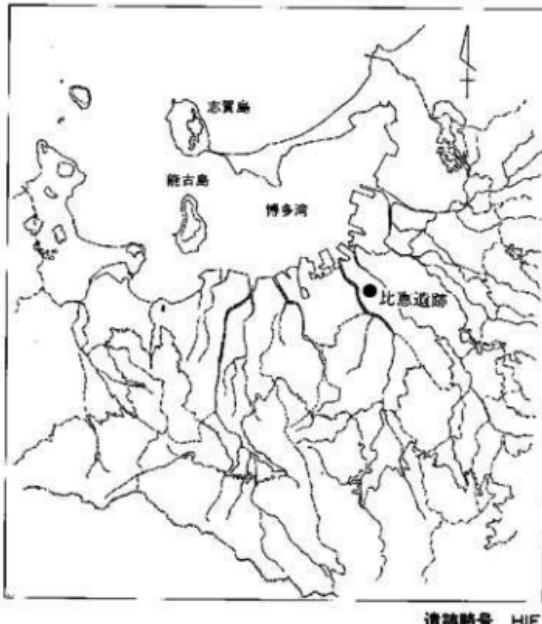
1993

福岡市教育委員会

HI E

# 比恵遺跡群 (12)

—比恵遺跡群第37次・39次発掘調査報告書—



1993

福岡市教育委員会



第39次調査地点SA-015、SB-016、017（北から）

# 序

「活力あるアジアの拠点都市」を目指して都市づくりを進める福岡市は、古くから我が国と大陸との主要な窓口でした。の中でも福岡平野は、弥生時代には「漢委奴国王」の金印に記された「奴國」が存在し、その後も対外交渉の拠点として重要な位置にあり、数々の貴重な遺跡が残されています。

しかし、近年の福岡市の著しい都市化により、それらが次第に失われつつあります。福岡市教育委員会では、それらの開発によって失われていく遺跡については事前に発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

今回報告する比恵遺跡群は「奴國」の重要な拠点集落でもあり、これまでに40次をこえる調査が実施され、数多くの貴重な遺構・遺物が発見されました。本書はそのうちの第37次・39次調査の報告書であります。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財への理解と認識の助けになり、また、研究資料としてご活用いただければ幸いです。

最後に発掘調査から資料整理に至るまで費用負担等ご協力を頂いた光伝導株式会社、中村俊治様をはじめとする関係各位には厚くお礼申し上げます。

平成5年1月

福岡市教育委員会

教育長 井口雄哉

## 例 言

1. 本書は民間開発に先立ち、福岡市教育委員会が調査を実施した、比恵遺跡群第37次、第39次調査の報告書である。
2. 本書に使用した遺構の実測は菅波正人、星山洋が、遺物の実測図は菅波が行った。製図は林田憲三、英豪之、境靖紀、菅波が行った。
3. 本書に使用した遺構、遺物の写真は菅波、星山が撮影した。
4. 本報告書の作成にあたっては星山洋、黒田和生、有島美江、岩崎加奈子、太山順子、諸方まさきよ、佐々木涼子、藤信子の協力を得た。
5. 遺構略号は棚→SA、建物→SB、竪穴住居跡→SC、土坑→SK、貯蔵穴→SU、柱穴→SPとした。
6. 本書に使用した方位は磁北である。
7. 本書の執筆、編集は林田の協力を得て、菅波が行った。
8. 本報告に係わる図面、写真、遺物はすべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。

Tab. 1 調査地点一覧表

調査地点	第37次調査地点	第39次調査地点
調査番号	9104	9134
地図番号	037-A-1	
調査地地籍	西多区博多駅南4-221	博多区博多駅南4-162-5
開発面積	879.33m <sup>2</sup>	366.98m <sup>2</sup>
対象面積	224m <sup>2</sup>	220m <sup>2</sup>
調査面積	170m <sup>2</sup>	210m <sup>2</sup>
調査期間	1991.4.22~5.23	1991.10.28~12.13

# 本文目次

第1章 はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
第2章 遺跡の立地と歴史的環境	2
1. 遺跡の立地	2
2. 周辺の遺跡	2
3. これまでの調査成果	4
第3章 第37次調査の報告	7
1. 調査の概要	7
2. 調査の記録	9
1) 貯蔵穴 (SU)	9
3. 小結	28
第4章 第39次調査の報告	29
1. 調査の概要	29
2. 調査の記録	31
1) 窪穴住居跡 (SC)	31
2) 土坑 (SK)	38
3) 棚 (SA)、掘立柱建物跡 (SB)	41
3. 小結	43

## 挿図目次

Fig. 1 比恵遺跡群と周辺の遺跡(1/50000)	3
Fig. 2 比恵遺跡群調査地点位置図(1/6000)	6
Fig. 3 第30次・37次・31次調査地点位置図(1/500)	7
Fig. 4 第30・37次調査地点遺構配置図(1/200)	8
Fig. 5 SU-037、039 遺構実測図(1/40)	10
Fig. 6 SU-038、040、041 遺構実測図(1/60)	11
Fig. 7 SU-037 出土上器実測図(1/4)	15
Fig. 8 SU-037、038 出土土器実測図(1/4)	16
Fig. 9 SU-038、039 出土土器実測図(1/4)	17
Fig.10 SU-039 出土土器実測図(1/4)	19
Fig.11 SU-039 出土土器実測図(1/4)	19
Fig.12 SU-039、040 出土土器実測図(1/4)	20
Fig.13 SU-040 出土土器実測図(1/4)	21
Fig.14 SU-040、041 出土土器実測図(1/4)	22
Fig.15 貯藏穴(SU) 出土石製品実測図(1/2、1/1)	24
Fig.16 第39次調査地点位置図(1/1000)	29
Fig.17 第39次調査地点遺構配置図(1/100)	30
Fig.18 壊穴住居跡遺構配置図(1/150)	31
Fig.19 SC-001、009 遺構実測図(1/60)	32
Fig.20 SC-002遺構実測図(1/60)	32
Fig.21 壊穴住居跡(SC) 出土遺物実測図1(1/4、1/2、1/1)	34
Fig.22 SC-006、007 遺構実測図(1/60)	35
Fig.23 壊穴住居跡(SC) 出土遺物実測図2(1/4、1/2)	36
Fig.24 壊穴住居跡(SC) 出土遺物実測図3(1/4)	37
Fig.25 SK-004、012 遺構実測図(1/40)	39
Fig.26 土坑(SK) 出土遺物実測図(1/4、1/2)	40
Fig.27 SA-015、SB-016、017 遺構実測図(1/100)	42
Fig.28 棚(SA)、掘立柱建物跡(SB) 出土遺物実測図(1/4)	43
Fig.29 那珂・比恵遺跡群古代倉庫群分布(1/8000)	45
Fig.30 比恵遺跡群第7・13次調査地点(1/500)	46
Fig.31 比恵遺跡群第8次調査地点(1/500)	47

Fig.32 那珂遺跡群第18次調査地点(1/500) .....	48
Fig.33 那珂遺跡群第23次調査地点(1/500) .....	49

## 図版目次

- 扉 第39次調査地点SA-015、SB-016、017(北から)
- PL. 1 1. 第37次調査地点遠景(北から)  
2. 第30次調査地点全景(北から)
- PL. 2 1. 第39次調査地点全景(北から)  
2. 第39次調査地点全景(南から)
- PL. 3 1. SU-037 完掘(東から)  
2. SU-037 遺物出土状況(北から)
- PL. 4 1. SU-038 土層(西から)  
2. SU-038 完掘(北から)
- PL. 5 1. SU-039 上層(西から)  
2. SU-039 遺物出土状況(南から)
- PL. 6 1. SU-039 完掘(南から)  
2. SU-040 土層(南から)
- PL. 7 1. SU-040 完掘(南から)  
2. SU-040 完掘(西から)
- PL. 8 貯蔵穴出土土器
- PL. 9 貯蔵穴出土土器
- PL. 10 貯蔵穴出土石製品
- PL. 11 1. 第7・13次調査地点遠景(西から)  
2. 第39次調査地点全景(北から)
- PL. 12 1. SC-001、009 完掘(東から)  
2. SC-002完掘(東から)
- PL. 13 1. SC-003完掘(東から)  
2. SC-008完掘(北から)
- PL. 14 1. SC-006、007完掘(北から)  
2. SK-004上層(西から)
- PL. 15 1. SK-004完掘(西から)  
2. SK-012土層(東から)
- PL. 16 1. SK-012完掘(東から)

2. SA-015、SB-016、017(北から)
- PL. 17 1. SB-016(北から)  
2. SB-017(北から)
- PL. 18 1. SA-015 SP-0155土層(東から) 2. SA-015 SP-0101土層(西から)  
3. SA-015 SP-0099土層(西から) 4. SA-015 SP-0097上層(西から)  
5. SA-015 SP-0084土層(西から) 6. SA-015 SP-0086土層(西から)  
7. SA-015 SP-0080土層(西から)
- PL. 19 1. SA-015 SP-0081土層(西から) 2. SA-015 SP-0090土層(西から)  
3. SA-015 SP-0089土層(西から) 4. SB-016 SP-0070土層(西から)  
5. SB-016 SP-0067土層(東から) 6. SB-016 SP-0071土層(東から)  
7. SB-016 SP-0066土層(西から) 8. SB-016 SP-0012土層(東から)
- PL. 20 1. SB-017 SP-0124上層(東から) 2. SB-017 SP-0049土層(西から)  
3. SB-017 SP-0022土層(西から) 4. SB-017 SP-0027土層(西から)  
5. SB-017 SP-0046土層(西から) 6. SB-017 SP-0045土層(西から)  
7. SB-017 SP-0031土層(西から) 8. SB-017 SP-0156土層(西から)

## 表目次

Tab. 1 調査地点一覧表	例言
Tab. 2 第37次調査地点貯蔵穴一覧	13
Tab. 3 第30次調査地点貯蔵穴一覧	13
Tab. 4 土器利用凹盤觀察表	23
Tab. 5 出土上器觀察表	25-27

# 第1章 はじめに

## 1. 調査に至る経緯

比恵遺跡群は昭和13、14年、鏡山猛、森貞次郎氏によって、最初の調査が行われて以来、1992年度現在、47次に及ぶ調査が行われてきた。その結果、環濠をはじめとする様々な集落構造、銅劍を副葬した豪棺墓など発見され、弥生時代の代表的集落遺跡として知られることとなった。しかし、その一方で比恵遺跡群が所在する博多駅南地区の開発は顕著で、相次ぐビル建築で日々町並みは変化している。埋蔵文化財課では比恵遺跡群も重点地区の一つとして、開発計画が上がるごとに試掘調査を実施し、各地点の状況の把握を努めている。その上で、地権者と遺跡保全のための設計変更等の協議を持つ。しかし、建物の構造上、地下の遺構に影響を及ぼす場合、地権者との協議の上、記録保存のための調査を実施している。1991年度は第37~39次までの3地点の調査が行われた。本書には第37、39次調査地点の報告を掲載する。

## 2. 調査の組織

調査は以下に示す組織構成で実施した。調査にあたって、光伝導株式会社並びに、中村俊治様には調査費用をはじめとして、条件整備等で多大なるご協力を頂いた。また、調査中は周辺の住民の皆様にご理解、ご協力を頂き、円滑に調査を行うことができた。ここに記して謝意を表する。

調査委託	第37次－光伝導株式会社、第39次－中村俊治
調査主体	福岡市教育委員会 教育長 井口雄哉 埋蔵文化財課長 折尾学 埋蔵文化財第二係長 塩屋勝利
調査庶務	埋蔵文化財第一係 吉田麻由美
調査担当	埋蔵文化財第二係 菅波正人、星山洋（現埋蔵文化財課第一係）
調査作業	石川文夫 上野竜太 内野弘行 広田熊雄 藤野保大 別府俊美 松井一美 吉住作美 石川洋子 川崎道子 武田潤子 西本スミ 野口ミヨ 日比野典子 星子輝美 森山キヨ子 山崎美枝子
整理補助	林田憲三 黒田和生 英豪之
整理作業	有島美江

## 第2章 遺跡の立地と歴史的環境

### 1. 遺跡の立地

福岡市の大部分を占める福岡平野は南北に延びる洪積丘陵と沖積平野からなり、北は博多湾に面し、東から南にかけて三郡、背振山塊に囲まれる。平野内には東から多々良川、御笠川、那珂川、樋井川、室見川が貫流し、それぞれの河川に開拓された丘陵や段丘によって画された小平野が形成される。狹義の福岡平野はその小平野の一つで、御笠川、那珂川流域の旧席田郡の一部、那珂郡、御笠郡を指している。比恵遺跡群は両河川に挟まれた平野内に位置し、春日丘陵から那珂川の蛇行に沿って延びてくる洪積丘陵北端に立地する。この丘陵は花崗岩風化礫層を基盤として、阿蘇山の火砕流による八女粘土、鳥栖ローム層が最上部に形成される。1km先の博多遺跡群が立地する砂丘との間は後背湿地となっている。遺跡の範囲は南北約1km、東西約0.8kmが予想され、現在の標高5~7mを測る。

### 2. 周辺の遺跡

福岡平野では数多くの遺跡が知られているが、特に春日丘陵とそこから北に延びてくる丘陵上には弥生時代遺跡がほぼ全域に分布する。春日丘陵には須恵岡本遺跡をはじめとして、その周辺では須恵永田、須恵坂本、須恵唐梨、岡木パンジャク、赤井手、大谷遺跡等で青銅器工房、埋納遺構が検出されており、質、量とともに他の弥生時代集落を圧倒している。春日丘陵から北側では弥永原、井尻、五十川、那珂遺跡等の遺跡が間断なく、続いている。又、丘陵の東側では初期水田、環濠集落で知られる板付遺跡、朝鮮系無文土器やゴホウラ製貝輪を副葬した豪棺墓が出土した諸箇遺跡等が存在する。一方、丘陵の北側の砂丘上に立地する博多遺跡群でも弥生時代前期には集落の形成が始まっている。

古墳時代においても、丘陵上の集落は継続していく。沖積地部分では那珂瀬ヲサ遺跡、那珂君休遺跡等で水出跡、大規模な井堰や水路が検出されている。一方、古墳は那珂川流域に首長墓クラスの前方後円墳が展開する。最古式の那珂八幡古墳にはじまり、安徳寺大塚古墳、老司古墳、博多1号墳、貝徳寺古墳、日抒塚古墳、劍塚古墳という系譜が想定されている。

古代においては福岡平野は那珂、御笠、席田の3郡に分割されるが、大半は那珂郡に属する。ところで、那珂郡衙の所在地はまだ限定しえないが、博多区那珂周辺に設けられた可能性がある。那珂遺跡群は比恵遺跡群の南側に位置し、7~8世紀にかけての遺構、遺物が数多く検出されている。那珂遺跡群第18次、23次調査地点では、今回報告する第39次調査地点で検出され



1. 野多遺跡群  
 2. 福岡城  
 3. 堅柏遺跡群  
 4. 吉原本町遺跡群  
 5. 吉塚遺跡群  
 6. 比恵遺跡群  
 7. 鶴河遺跡群  
 8. 鶴河大ツラ道路、鶴河君休遺跡  
 9. 板付遺跡  
 10. 鶴岡遺跡  
 11. 錦居遺跡  
 12. 五十川糸木遺跡  
 13. 井尻遺跡群  
 14. 日佐遺跡群  
 15. 斎政麿御遺跡  
 16. 渡辺水田遺跡  
 17. 渡辺岡本遺跡  
 18. 渡辺四丁目遺跡  
 19. 宗井手遺跡  
 20. 三宅庵寺  
 21. 野多呂遺跡  
 22. 野多自給遺跡

Fig. 1 比恵遺跡群と周辺の遺跡(1/50000)

た軒を連ねる総柱建物と同様の建物が検出されている。また、第13次、22次、23次、32次、34次調査地点では神ノ前窓、月の浦窓の初期瓦や百濟系單耳軒丸瓦、鶴尾等が検出されており、寺院や官衙等の存在が予想される。那珂遺跡群の南東1.5kmの高畠廃寺は8世紀中葉の創建と見られるが、「都」「中」「寺」等の墨書き土器があり、都寺の可能性をもつ寺院である。

### 3. これまでの調査成果

比恵遺跡群は鏡山猛、森貞次郎氏による調査以来、1992年度現在、47次の調査が行われた。比恵遺跡群のある博多区駅南地区は戦前の区画整理、近年の市街化のため、本来の地形を伺うことはできない。しかし、幾つかの調査地点で旧地形を復元するための成果がある。遺跡群の北側にある第4、26次、第24、25、32次、第29次調査地点では台地の落ち際、谷部が検出され、台地の先端には入り込んだ谷があることが判明した。遺跡群西側では第23次調査地点で西側に落ちていく台地の落ちか検出されている。しかし、これより更に西にある第3次、8次調査地点では台地上で造構が検出されることから、両者の間には谷があると考えられている。第47次調査地点では東側に落ちていく台地の落ちが検出されている。また、第31次調査地点では東西方向に流れる河川跡が検出された。この河川跡は周辺の試掘調査等から台地を横切って流れていたと考えられる。以上、これらの皮果を総合すると、比恵遺跡群は地形的に3つの地区に分けられると考える。第4、26次、第24、25、32次、第29次調査地点のある遺跡群北側（北台地）、第3、8次調査地点がある遺跡群の西側（西台地）、中央部分（中央台地）の3つが想定される。

次に遺跡の時期的変遷を簡単に見ていく。比恵遺跡群で造構、造物が確認できるのは旧石器時代まで遡れる。造構は未だ、検出されていないが、第19次調査地点ではナイフ形石器が検出されている。

続く繩文時代は突帯文上器以前の出土例はほとんどない。第30次調査地点で前期の深鉢が検出されているのみである。突帯文土器では第3次調査地点でまとまった遺物が出土している。

弥生時代以後は遺跡は間断なく継続していく。弥生時代前期は北台地、西台地で集落は形成される。特に、北台地では竪穴式住居、貯蔵穴、木器貯蔵穴等が検出されている。第24～26次調査では谷部の木器貯蔵穴から多数の農具、工具、容器の他、有柄式木劍、儀杖なども出土している。また、第30、37次調査地点では貯蔵穴が40基余り検出され、集落の貯蔵空間と考えられる。中期になると、集落は中央台地にも拡大する。中央台地で第6次調査では細形銅劍を副葬した甕棺墓や墳丘墓と考えられる甕棺墓群が検出されている。この他、溝（環濠？）、井戸、貯蔵穴等が多数検出され、集落の中心は中央台地に移ったと考えられる。後期では、第1、9次調査地点で方形区画の環濠が検出されている。第7、27次調査地点では大型の倉庫群が検出

されている。また、第36次調査地点では庄内並行期の方形周溝墓が検出されている。

古墳時代後期になると、第8次、第7、13次、第39次調査地点で大規模な掘立柱建物、櫛が検出されている。これらは6世紀後半から7世紀前半頃まで遺構群で、「那津官家」関連の施設と考えられている。これ以後は官衙の遺構は那刑遺跡群に見られるようになる。

以上、時期的変遷を簡単に触れたが、各調査地点の詳細は既刊の報告書を見て頂きたい。

#### 比恵遺跡群の調査に関する文献、報告書

鏡山猛「環濠住居小論一～四」「史蹟67、68、74、78」九州大学1956～1959年

筑紫野古代史研究会「見捨てられた春住遺跡」「筑紫野史学研究会会報第2集」1972年（第3次調査）

古岡完祐「瑞穂・福岡市比恵台地遺跡」日本住宅公団1980年（第4次調査報告）

横山邦雄・浜石哲也編「比恵遺跡－第6次調査・遺構編－」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第94集」福岡市教育委員会1983年

横山邦雄・浜石哲也編「比恵遺跡－第6次調査・遺物編－」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第130集」福岡市教育委員会1986年

柳沢一男編「比恵遺跡－第8次調査概要－」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第116集」福岡市教育委員会1985年

杉山富雄編「比恵遺跡－第9・10次調査報告書－」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第145集」福岡市教育委員会1986年

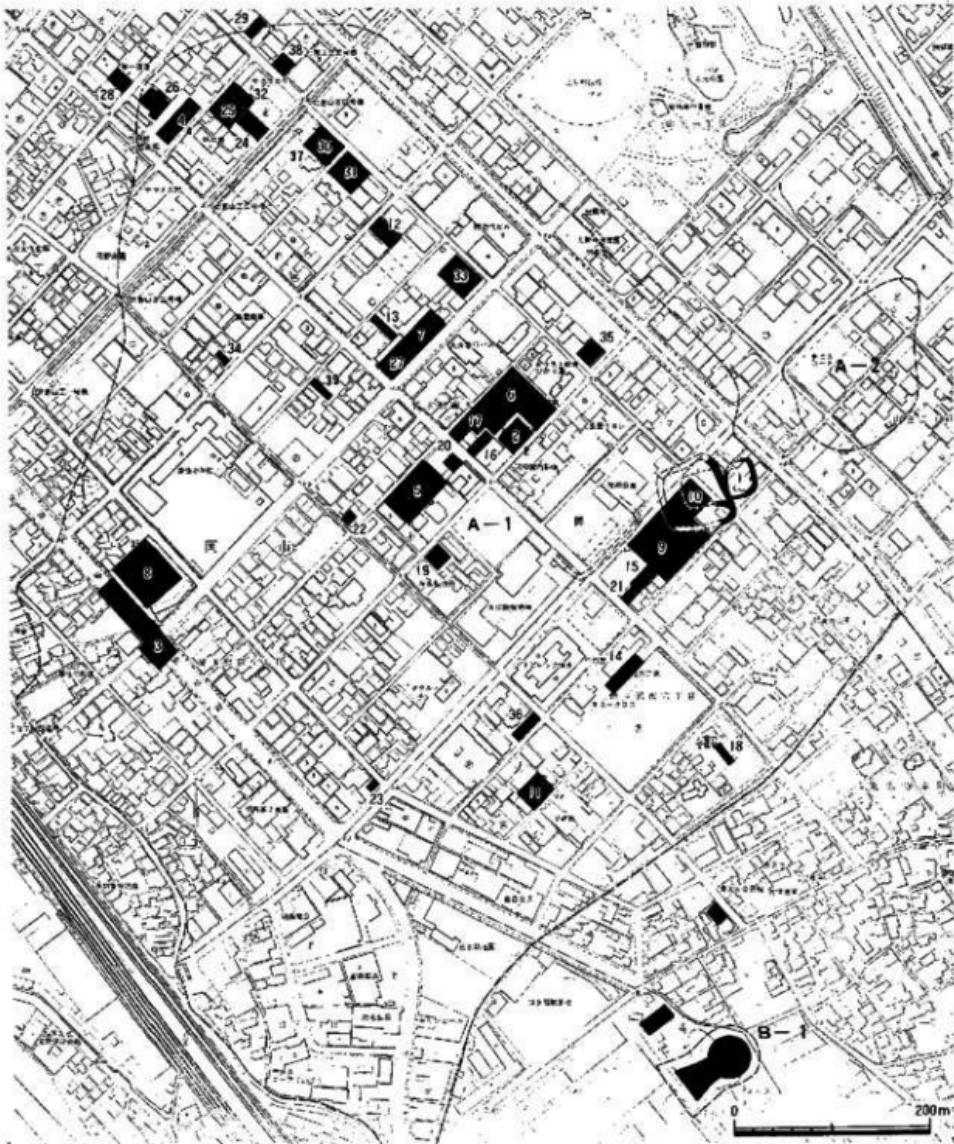
山崎龍雄・米倉秀紀編「中部地区埋蔵文化財調査報告II」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第146集」福岡市教育委員会1987年（第11次調査報告）

吉留秀敏編「比恵遺跡群(8)」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第174集」福岡市教育委員会1988年（第12、14、16、17次調査報告、第13、15次概要）

山口謙治編「比恵遺跡群(9)」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第227集」福岡市教育委員会1990年（第17、18、20、23次調査報告）

吉留秀敏編「比恵遺跡群(10)」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第255集」福岡市教育委員会1991年（第19、24～28次調査報告）

菅波正人編「比恵遺跡群(11)」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第289集」福岡市教育委員会1992年（第29～32、34～36次調査報告）



比恵運動群 1. 第1次調査地点 2. 第2次調査地点 3. 第3次調査地点 4. 第4次調査地点 5. 第5次調査地点  
 6. 第6次調査地点 7. 第7次調査地点 8. 第8次調査地点 9. 第9次調査地点 10. 第10次調査地点  
 11. 第11次調査地点 12. 第12次調査地点 13. 第13次調査地点 14. 第14次調査地点 15. 第15次調査地点  
 16. 第16次調査地点 17. 第17次調査地点 18. 第18次調査地点 19. 第19次調査地点 20. 第20次調査地点  
 21. 第21次調査地点 22. 第22次調査地点 23. 第23次調査地点 24. 第24次調査地点 25. 第25次調査地点  
 26. 第26次調査地点 27. 第27次調査地点 28. 第28次調査地点 29. 第29次調査地点 30. 第30次調査地点  
 31. 第31次調査地点 32. 第32次調査地点 33. 第33次調査地点 34. 第34次調査地点 35. 第35次調査地点  
 36. 第36次調査地点 37. 第37次調査地点 38. 第38次調査地点 39. 第39次調査地点

Fig. 2 比恵運動群調査地点位置図(1/6000)

## 第3章 第37次調査の報告

### 1. 調査の概要

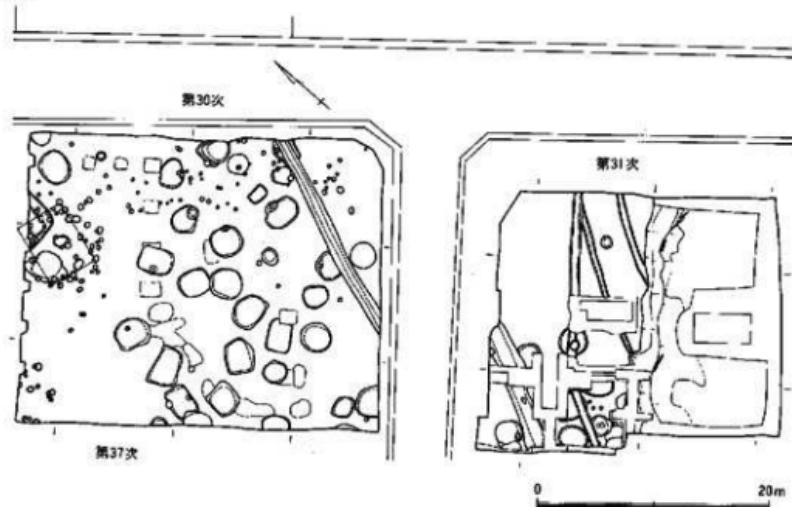
本調査地点は、比恵遺跡群の北東端部に位置し、第30次調査で調査対象外になった部分である。第30次調査終了後、この土地は転売され、全域を工事対象とする計画の事前審査願いが埋蔵文化財課に提出された。協議の結果、前回未調査の部分の調査を行うこととなった。

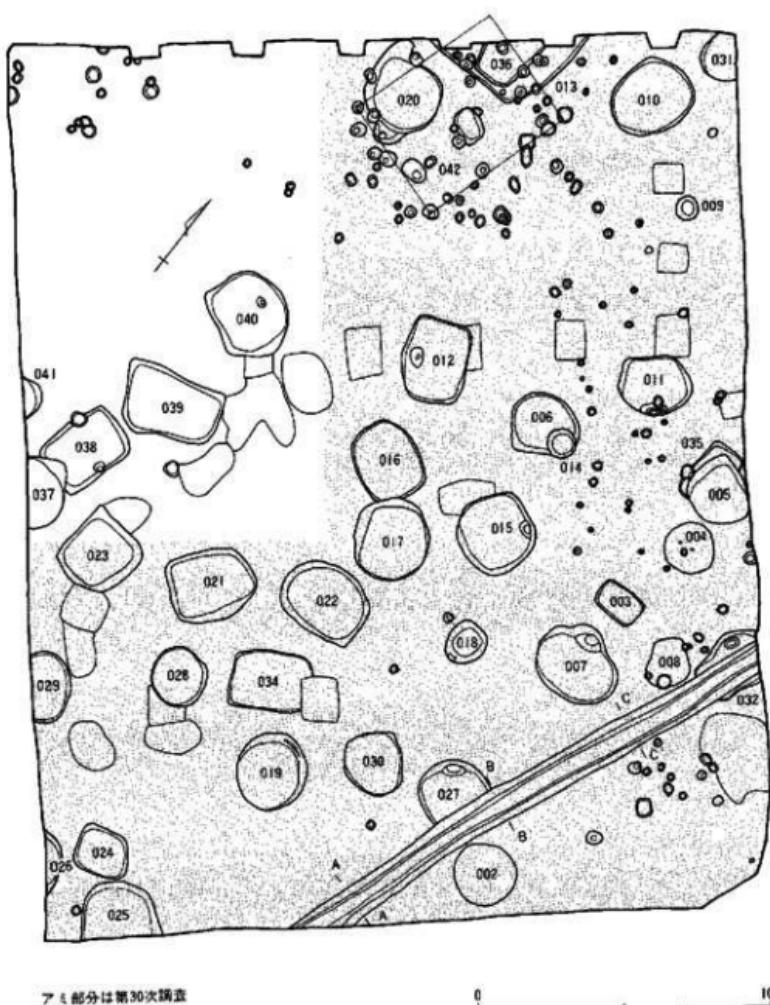
本調査地点は第31次調査地点に隣接する。北西100m先には第24・25・32次調査地点があり、台地の先端に入り込んだ狭い谷が検出されている。

調査は約70~100cmの盛土を撤出した後に行った。盛土を除去すると、基盤の鳥栖ロームとなり、その面で遺構の検出作業を行った。遺構面の標高は約5.2~5.4mである。

遺構は弥生時代前期の貯蔵穴5基、柱穴等を検出した。この結果、この地点で検出された遺構は弥生時代前期の貯蔵穴29基、弥生時代中期の井戸3基、古墳時代前期の溝1条、古墳時代の竪穴住居跡1軒、掘立柱建物1棟となる。

本調査地点の遺構番号は前回の調査との継続性を鑑み、前回の遺構番号に続けて3桁の遺構番号を付けた（前回の最終の遺構番号はSU-036、従って、今回は037から検出順に番号を付けた）。





アミ部分は第30次調査

0 10m

Fig. 4 第30次・37次調査地点遺構配置図(1/200)

## 2. 調査の記録

### 1) 貯蔵穴 (SU)

今回の調査では5基の貯蔵穴を検出した。第30次調査分を含めると、34基の貯蔵穴がこの地域に群集することとなる。前回調査分を含めてここで概述すると、造構の分布の状態から更に調査区外に、広がると考えられる。造構の遺存状態はあまりよくなく、入口部分の旧状と留めているものはほとんどない。坑壁は袋状を呈するものが多い。残存する造構の深さは30~140cmで、本来は深さ2mを超えるものもあったと考える。しかし、床面が鳥栖ローム層を掘り抜いて、八女粘土層まで達しているものはない。鳥栖ローム層と八女粘土層の境には湧水層があり、八女粘土層まで達すると湧水する。したがって、本貯蔵穴は湧水を避けるように掘りこまれていることがわかる。坑底の平面形は円形、長方形、橢円形がある。この他、坑底の壁際に浅い窪みを持つものがあり、梯子などの昇降施設による沈み込みが考えられる (SU-007, 011, 015, 027, 032, 039)。

埋土は貯蔵穴として使用しなくなった後に流れ込んだ暗褐色系の粘質土がレンズ状に堆積するものが多いが、中には使用後すぐに地山の鳥栖ロームで埋め戻しているものもある。

貯蔵穴は調査区全域に分布するが、切り合いはほとんど見られない。そして、造構の分布にはおおまかに、3つの小群が認められる。1群は調査区北側に位置し、更に、北側に造構の分布が予想される (SU-010, 020, 031, 036)。2群は調査区中央に位置するものである (今回調査分もこれに含まれる)。3群は調査区南側に位置するもので、更に、南側に造構の分布が予想される (SU-024, 025, 026)。

遺物は弥生土器 (甕、壺、鉢、高杯)、石器 (磨製石斧、石包丁、石鎌、紡錘車等) が出土した。この他、貝殻、魚骨、獸骨、炭化米も出土した。遺物はほとんど廃棄されたもの、もしくは流れ込んだもので、坑底に据えられていた状態で出土したものはない。

出土遺物には板付I式段階のものも見られるが、造構の時期は概ね弥生時代前期中葉 (板付II式古) ~ 前期末 (板付II式新) に位置付けられる。

#### SU-037 (Fig. 5)

調査区西側に造構は広がり、SU-038を切る。平面形は円形で、壁は若干袋状に立ち上がる。埋土は上面壁際には崩れ落ちたロームが、それ以下はロームまじりの暗褐色粘質土が堆積する。坑底上面の6、7層は凸レンズ状に堆積する。本来の入口部分はかなり窄まっていたと考えられる。遺物は主に5層から出土した。完形復元出来るものもあるが、出土状況から貯蔵穴が廃絶した後に、廃棄もしくは流れ込んだものであろう。遺物には弥生土器、石斧、紡錘車、黒曜石剝片が出土した。また、7層からは炭化米を検出した。

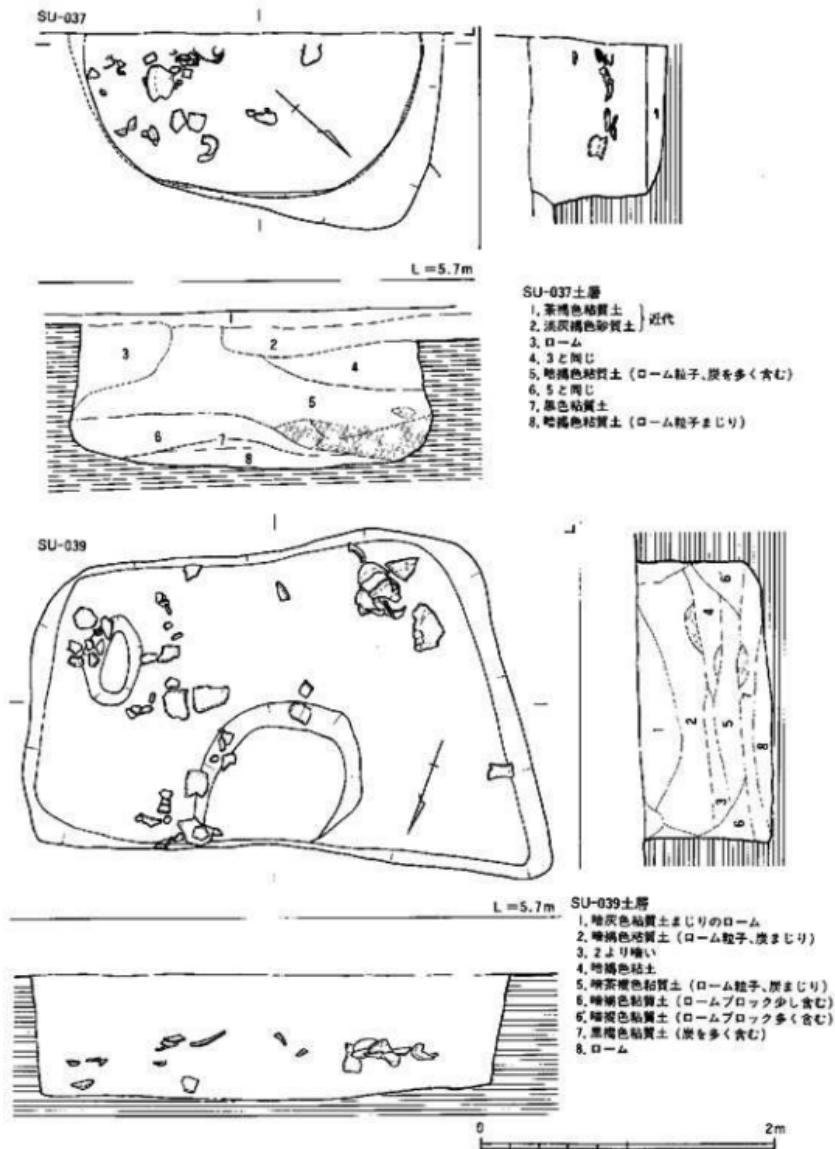


Fig. 5 SU-037, 039 透構実測図 (1/40)

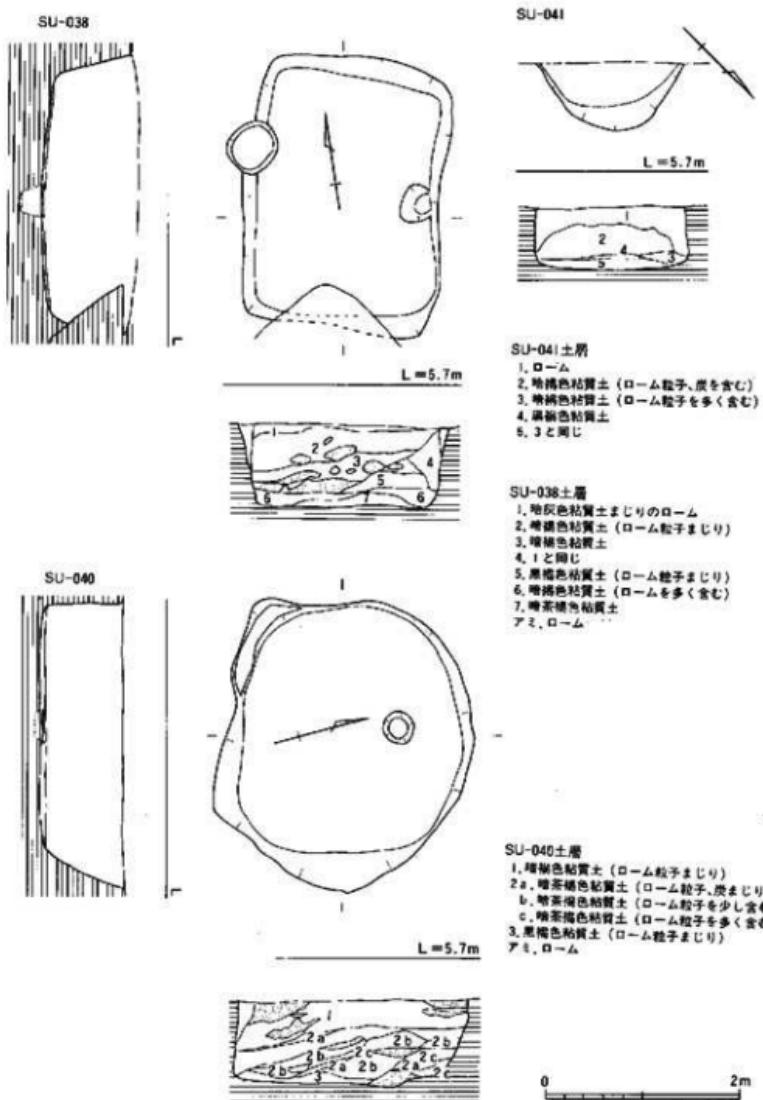


Fig. 6 SU-038, 040, 041構造実測図(1/60)

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期末葉に位置づけられる。

SU-038 (Fig. 6)

SU-037に切られる。平面形は長方形で、壁は開き気味に立ち上がる。埋土は上面には崩れ落ちたロームが、それ以下は暗褐色粘質土が堆積する。2、3層にはロームブロックが多く含まれる。坑底上面の7層は凸レンズ状に堆積する。坑底東側壁際には柱穴がある。遺物は各層から散漫に出土した。出土状況から貯蔵穴が廃絶した後に、流れ込んだものであろう。遺物には弥生土器、黒曜石剝片等が出上した。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期後葉に位置づけられる。

SU-039 (Fig. 5)

平面形は不整長方形で、壁は開き気味に立ち上がる。埋土は上面には崩れ落ちたロームが、それ以下は暗茶褐色粘質土が堆積する。それ以下はロームまじりの暗褐色粘質土が堆積する。坑底上面の7、8層は凸レンズ状に堆積する。本来の入口部分はかなり窄まっていたと考えられる。坑底北側壁際には浅い窪みがある。梯子等による沈み込みと考えられる。遺物は出土状況から貯蔵穴が廃絶した後に、廃棄もしくは流れ込んだものであろう。遺物は主に5層から出土した。5層の堆積時に廃棄行為があったと考えられる。遺物には弥生土器、石包丁、石斧、石錐、磨製石鎌、管玉、黒曜石剝片等が出土した。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前後葉～末葉に位置づけられる。

SU-040 (Fig. 6)

平面形は梢円形で、壁は開き気味に立ち上がる。埋土は上面には崩れ落ちたロームが、それ以下は暗褐色粘質土が堆積する。1と2層の間にはロームブロックが多く含まれる。2層は北側からの流れ込みによる堆積と考えられる。坑底北側には柱穴がある。遺物は各層から散漫に出土した。出土状況から貯蔵穴が廃絶した後に、廃絶もしくは流れ込んだものであろう。遺物には弥生土器、石錐、黒曜石剝片等が出上した。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期後葉に位置づけられる。

SU-041 (Fig. 6)

調査区西側に広がる。平面形は円形を呈する。壁は若干袋状に立ち上がる。埋土は上面には崩れ落ちたロームが、それ以下は暗褐色粘質土が堆積する。坑底上面の3～5層は凸レンズ状に堆積する。遺物は各層から散漫に出土した。出土状況から貯蔵穴が廃絶した後に、流れ込んだものであろう。遺物には弥生土器、黒曜石剝片等が出土した。

本貯蔵穴は出土遺物から、弥生時代前期中葉～後葉に位置づけられる。

貯蔵穴 (SU) 出土の土器 (Fig. 7～14)

貯蔵穴出土の土器はほとんどが弥生時代前期の板付II式に位置づけられる。器種構成を見ると、甕、壺、鉢が大半を占め、これに若干の高杯が加わるという状況を示している。そのうち、

Tab. 2 第37次調査地点貯藏穴一覧

Fig.	遺構番号	法量 (cm · m²) 長径×短径×深さ×底面積	底面の平面形	出土遺物	時期 (前期)	備考
5	037	245×—×78×(1.96)	円形	弥生土器 1~19、石器	末	半分未掘、038を切る
6	038	276×198×95×(3.82)	隅丸長方形	弥生土器 31~51、石器	後葉	壁際に柱穴 1
5	039	331×220×86×(7.63)	不整長方形	弥生土器 52~101、石器	後~末	壁際に浅い窪み
6	040	296×246×85×(4.0)	不整橢円形	弥生土器 102~126、石器	後葉	坑底に柱穴 1
6	041	—×—×65×(0.46)	円形か	弥生土器 127~133、石器	中~後	半分未掘

Tab. 3 第38次調査地点貯藏穴一覧

遺構番号	法量 (cm · m²) 長径×短径×深さ×底面積	底面の平面形	出土遺物	時期 (前期)	備考
002	220×220×60×3.39	円形	弥生土器、石包丁、磨石他	中	
003	166×107×30×1.34	長方形	弥生土器、利片	中	床面に柱穴あり
004	185×170×50×2.36	円形	弥生土器、利片	後~木	床面中央に柱穴あり
005	—×190×68×2.88	不整橢円形	弥生土器、柱状片 刃石斧他	後	035を切る
006	—×220×114×(2.48)	不整橢円形	弥生土器、刃石斧他	中~後	SE014に切られる
007	308×261×106×4.62	不整橢円形	弥生土器、石包丁、利片他	中	壁際に 1 カ所浅い窪みあり
008	183×155×80×2.44	不整橢円形	弥生土器、磨石、利片	後	
010	294×244×110×5.12	楕円形	弥生土器、石包丁、石錐他	中~後	
011	256×205×80×3.51	不整橢円形	弥生土器、磨石、利片	後~木	壁際に 1 カ所浅い窪みあり
012	290×228×85×5.12	隅丸長方形	弥生土器、刃石斧他	中~後	壁際に 1 カ所浅い窪みあり
015	280×266×98×4.62	楕円形	弥生土器、刃石、利片他	中~後	壁際に 1 カ所浅い窪みあり
016	—×230×62×5.03	不整橢円形	弥生土器、刃石斧他	中~後	017に切られる
017	287×262×65×4.70	楕円形	弥生土器、利片他	後	016を切る
019	262×242×100×3.81	楕円形	弥生土器	後	
020	265×240×80×4.29	不整円形	弥生土器、砥石、利片他	後~末	
021	295×250×77×4.65	不整長方形	弥生土器、磨石、利片他	中~後	
022	308×247×76×4.98	楕円形	弥生土器、刃石斧他	中	
023	258×215×108×3.59	不整長方形	弥生土器、刃石斧他	後	第37次調査区に広がる
024	191×164×54×2.06	不整橢円形	弥生土器、刃石斧他	後	
025	—×—×64×(3.53)	不整橢円形	弥生土器、石錐、利片他	後	半分未掘
026	—×—×—×(—)	?	弥生土器	中	大半未掘
027	—×—×60×(2.74)	楕円形	弥生土器、紡錘車	後	壁際に 1 カ所浅い窪みあり
028	205×190×80×2.57	不整円形	弥生土器、砥石、利片他	後	
029	—×—×60×(2.33)	不整橢円形	弥生土器、利片	中	半分未掘
030	224×202×80×3.28	不整円形	弥生土器、利片	末	半分未掘
031	—×—×140×(1.62)	不整円形	弥生土器、石包丁、利片	木	半分未掘
032	—×—×200×96×(1.86)	不整橢円形	弥生土器	後	壁際に 1 カ所浅い窪みあり
035	225×130×30×(0.64)	長方形	弥生土器	中	005に切られる
036	—×—×36×(1.81)	長方形	弥生土器	中	半分未掘、013に切られる

甕、鉢には口縁が如意形を呈するものと口縁外間に突帯を貼り付けて逆L字形を呈するものがある。前回の報告同様、前者を甕・鉢A、後者を甕・鉢Bとして、以下、記述していく。

#### SU-037 (1~19)

1~3は中型、4、5は大型の甕である。1は頸部と胴部の境に断面三角形の突帯を貼り付け、それ以下に無軸の羽状文を施す。胴部の最大径は中位より上方にあり、肩の張る形態を呈している。2は肩部に3条の沈線を施す。胴部の最大径は中位にある。3は口縁内面に粘土を貼り付けて段を付ける。4は口唇の下端に刻目を施す。5は口縁内面に粘土を貼り付けて段を付け、口縁外面には刻目を施す。頸部には刻目突帯を施す。6~12は甕Aで、7以外は口唇下端に刻目を施す。6~8は口縁下に突帯を、12は1条の沈線を施す。13、14は甕Bで口唇に刻目を、13は口縁下に突帯を施す。15~19は甕の底部である。18、19は底が厚く、18は若干上底に、19は底が開く。板付II式新段階に位置づけられる。

#### SU-038 (20~30)

20~25は甕口縁である。21~25は口縁内面に粘土貼り付けや強いナデによる段を持つ。23~25は口唇上、下端に刻目を施す。26~30は有文の甕胴部である。26は貝殻施文による重弧文を、27はヘラ描きによる重弧文を施す。28はヘラ描きによる山形文を施す。29はヘラ描きによる有軸羽状文を施す。30は貝殻施文による羽状文を施す。31は小型甕の底部、32、33は大型甕の底部である。34~45は甕Aである。34~41は口唇下端に刻目を施す。39は口縁下に沈線を、40、41は刻目突帯を施す。46は甕Bで、口縁下に刻目突帯を施す。47、48は甕の底部で、47は焼成後、外面から穿孔を施す。49は楕円形の鉢である。口縁は波状を呈する。内面はヘラミガキを、外側は削痕を施す。50、51は高坏である。口縁は粘土を貼り付け、段を付ける。51は脚で、坏部との境に突帯を施すが、剥落している。板付II式中段階に位置づけられる。

#### SU-039 (上層52~66、下層67~87)

SU-039の遺物は出土状況から1~4層のものを上層、それ以下を下層とした。上層は52~66、下層は67~87である。52~54は甕口縁である。口唇上、下端に刻目を施す。52、53は口縁内面に粘土を貼り付けて、段を付ける。55は甕底部である。56~62は甕Aである。56は口唇全面に、57~60は口唇下端に刻目を施す。58~60は口縁下に刻目突帯を施す。63、64は甕Bで、口唇に刻目を施す。65、66は甕底部である。65は焼成後に外底面から穿孔を施す。67~73は甕口縁である。67~69は口縁外面に粘土を貼り付けて段を付ける。70、71は口縁内面に粘土を貼り付けて段を付ける。74は肩部に無軸の羽状文を施す。胴部最大径は中位にある。75~77是有文の甕胴部で、75は貝殻施文による有軸羽状文、76はヘラ描きによる無軸の羽状文、77は4条の沈線を施す。78、79は甕底部である。80~92は甕Aである。88は口唇全面に、80~84、89~92は口唇下端に刻目を施す。82、89、90は口縁下に沈線を、91、92は刻目突帯を施す。89は底部に焼成後に外底面から穿孔を施す。93は甕Bで口唇に刻目を施す。94~96は甕底部である。96は

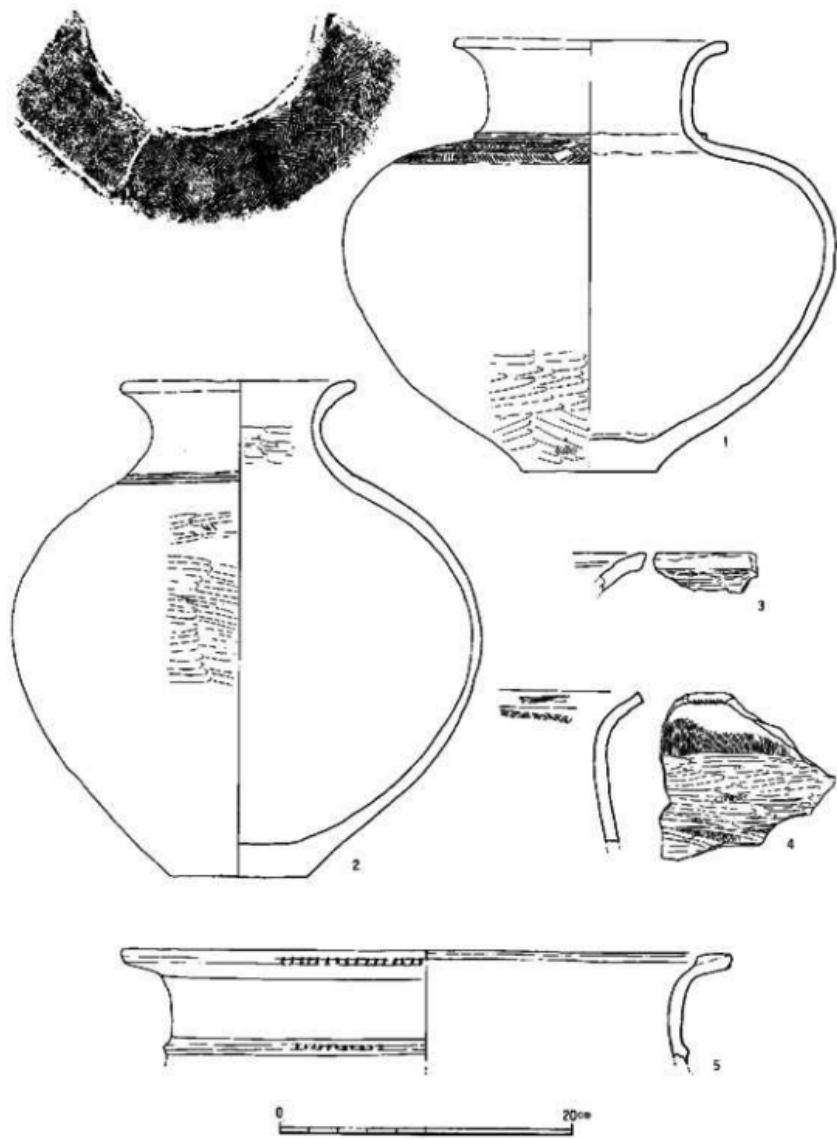


Fig. 7 SU-037出土土器実測図(1/4)

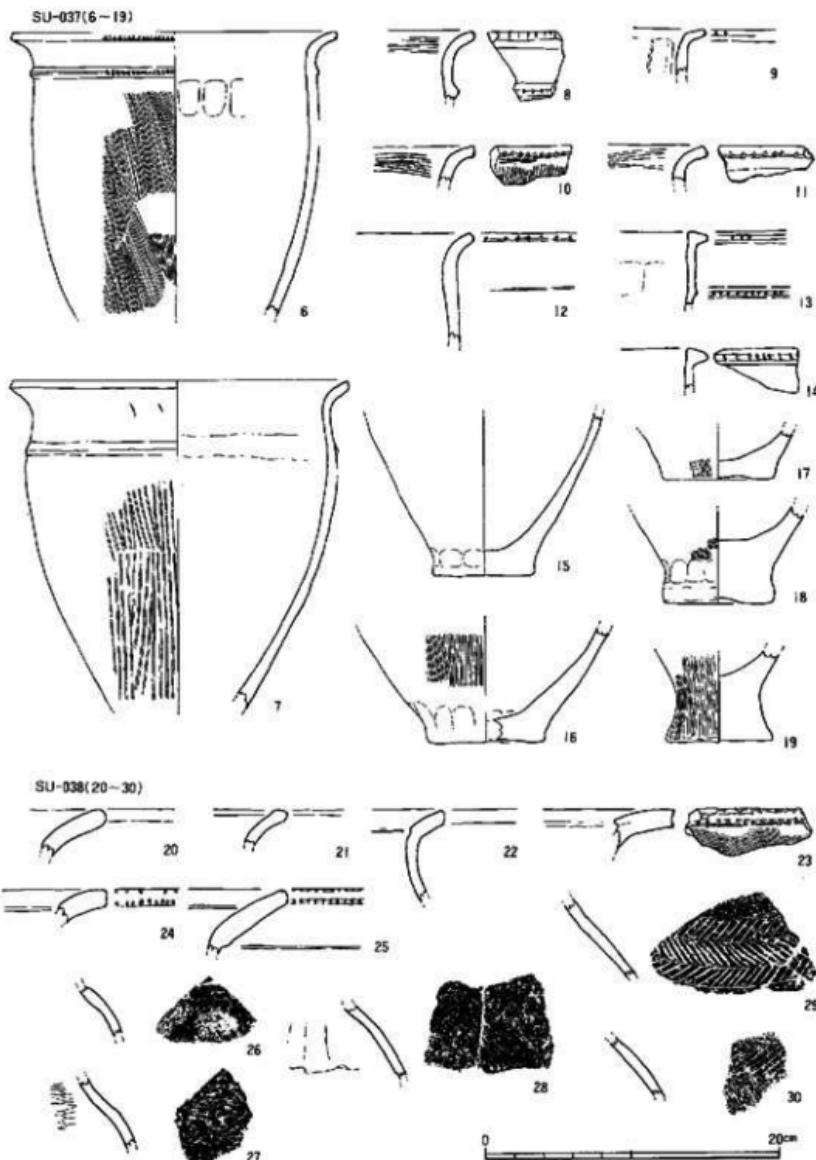


Fig. 8 SU-037、038出土土器実測図(1/4)

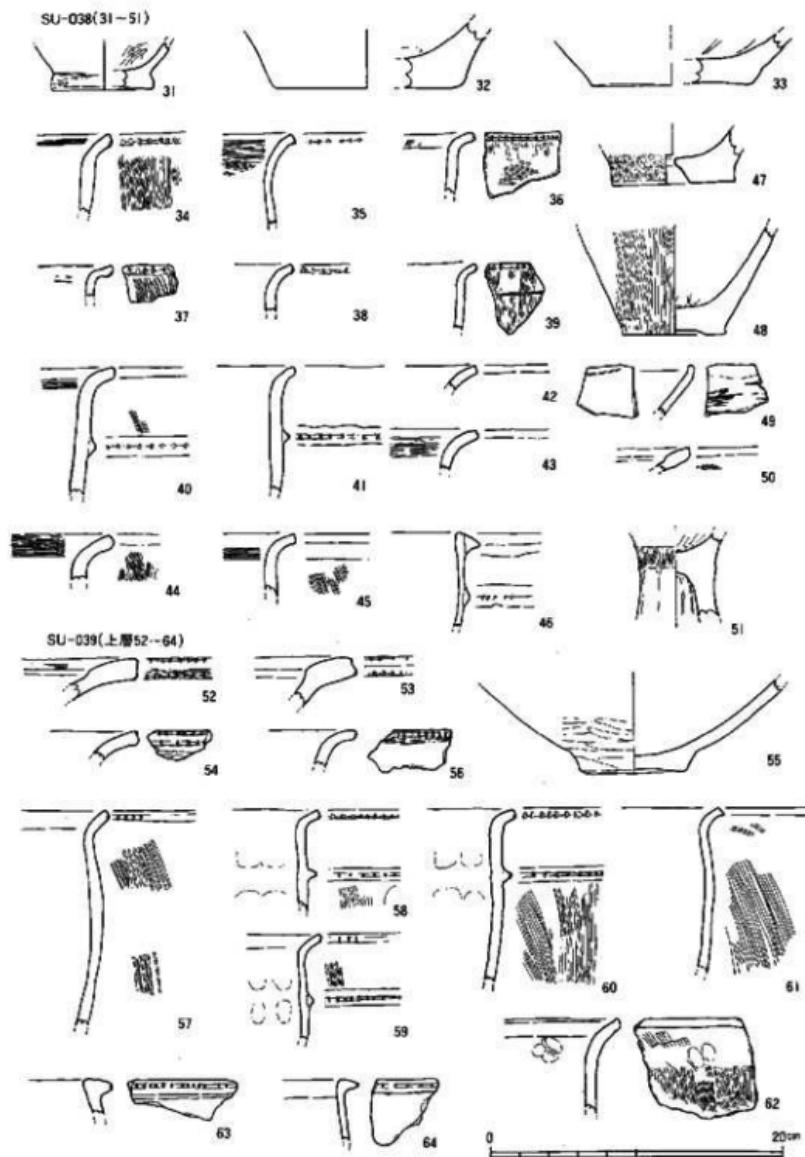


Fig. 9 SU-038、039出土土器実測図(1/4)

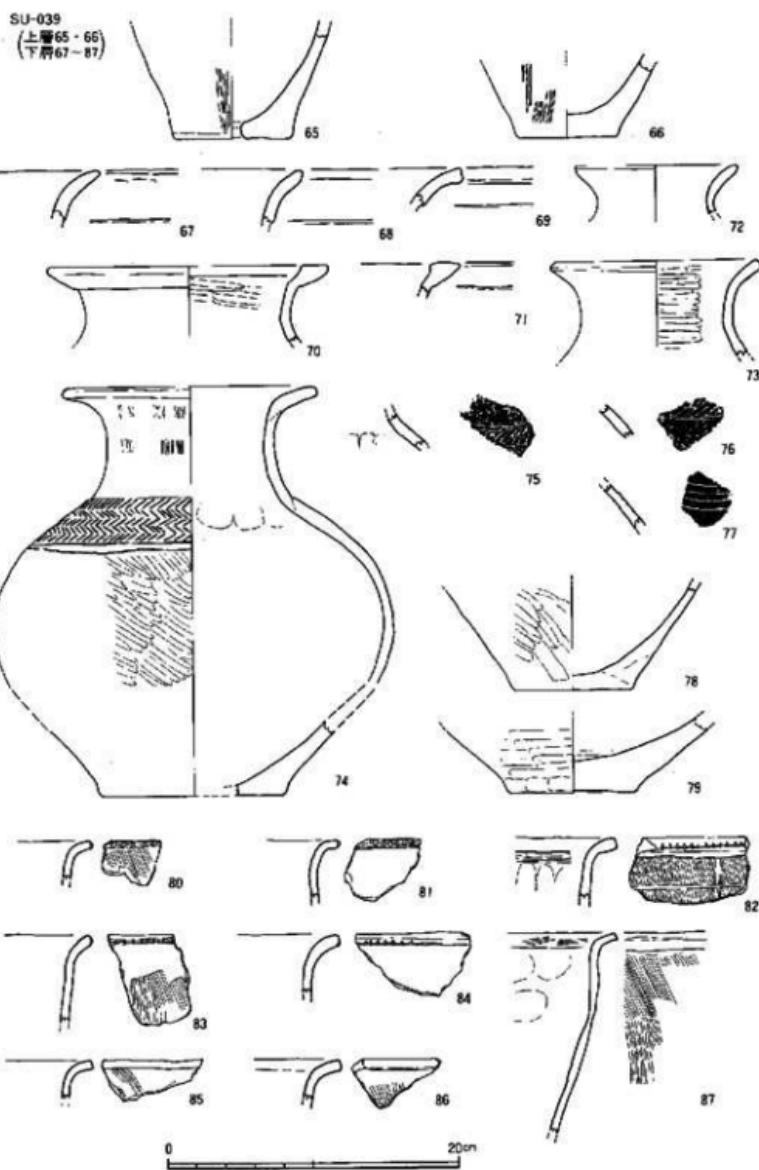


Fig.10 SU-039出土土器実測図(1/4)

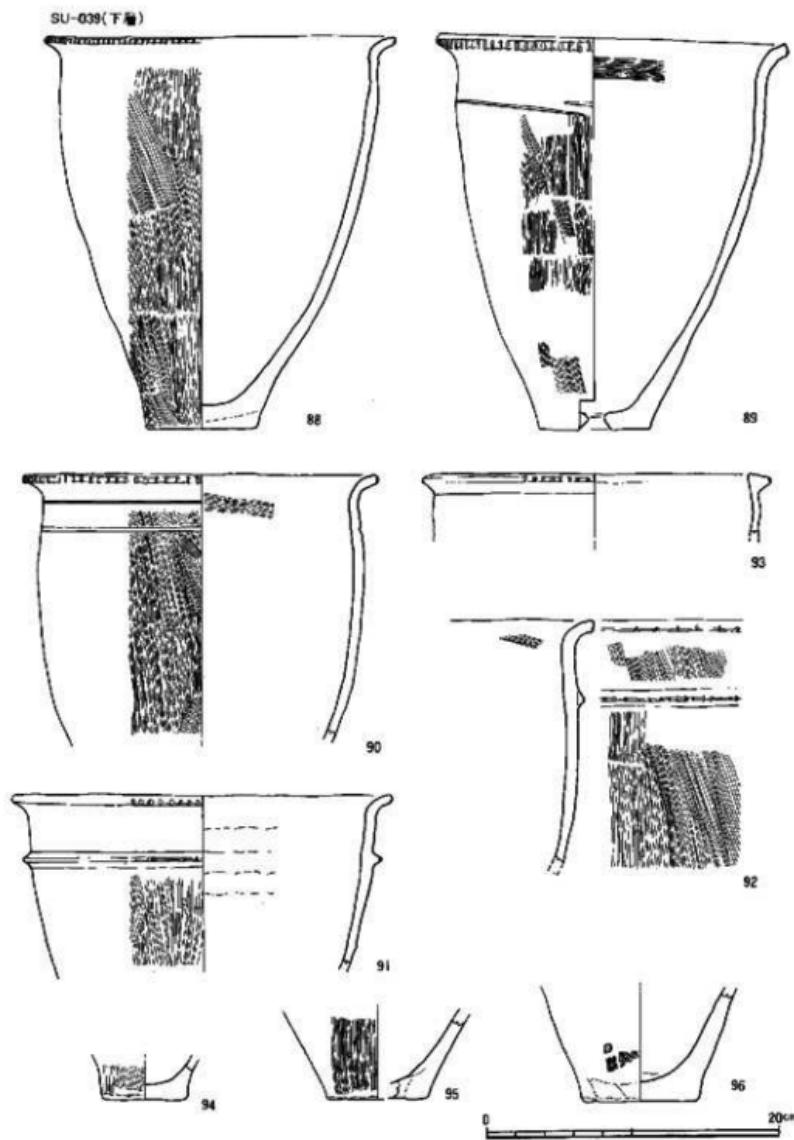
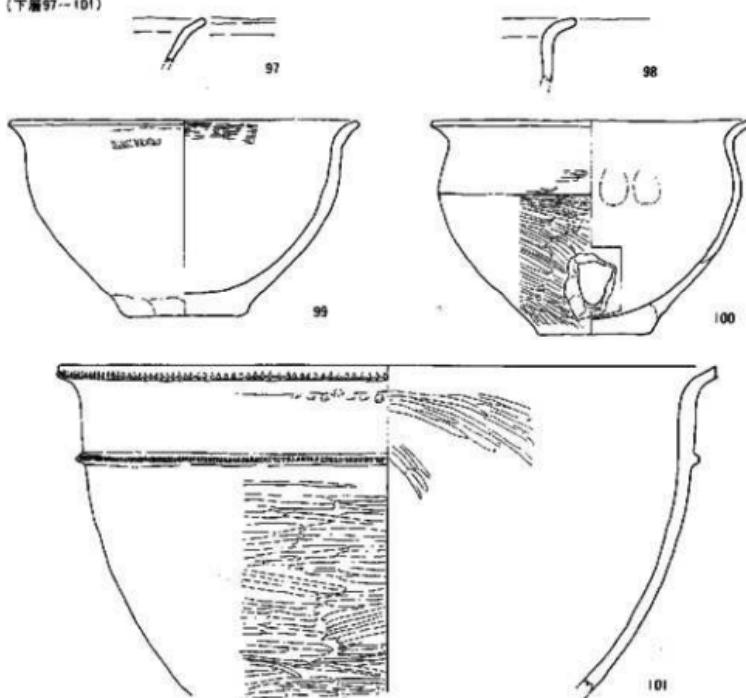


Fig.11 SU-039出土土器実測図(1/4)

SU-039  
(下層97~101)



SU-040(102~104)

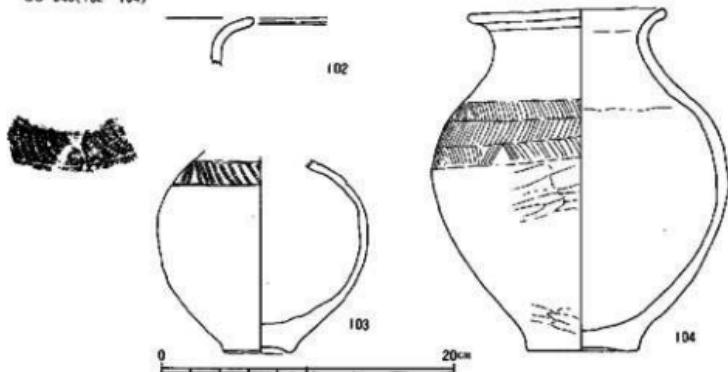


Fig.12 SU-039、040出土土器実測図(1/4)

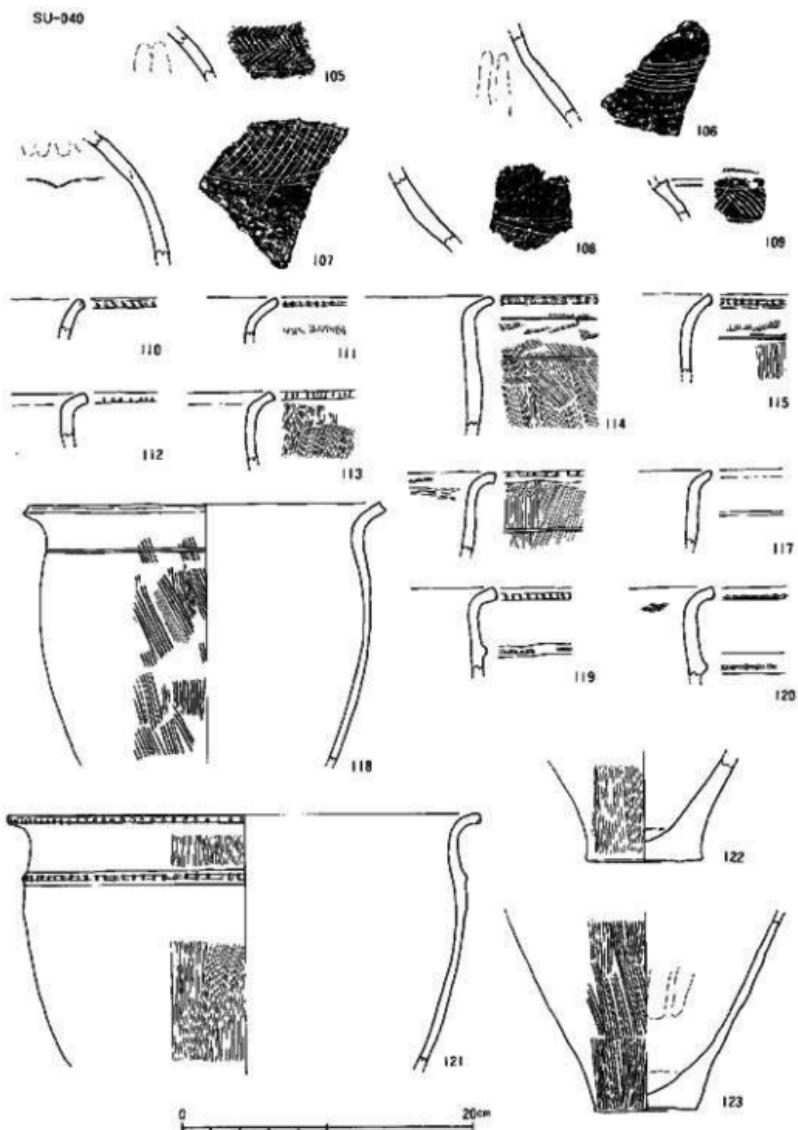


Fig.13 SU-040出土土器実測図(1/4)

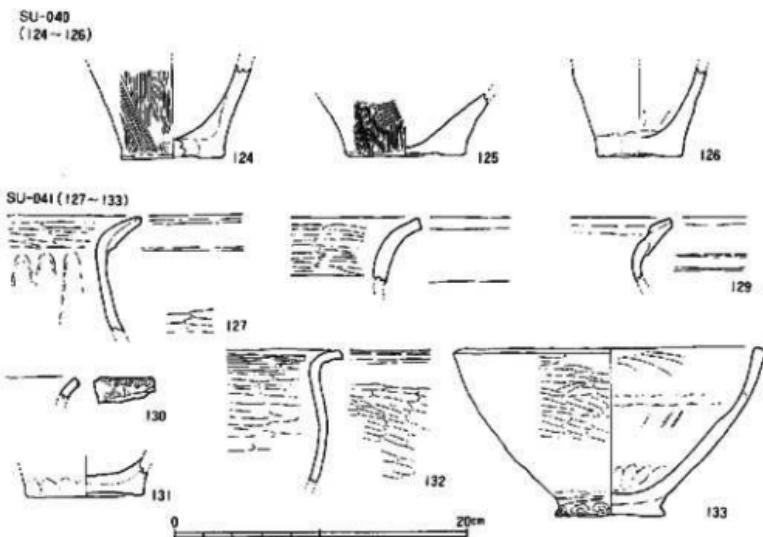


Fig.14 SU-040, 041出土土器実測図(1/4)

胴部下年に切口痕がある。97~101は鉢Aである。100は胴部上半でくの字に屈曲する。胴部下半には焼成後に外面から穿孔を施す。101は大型の鉢で、口唇下端に刻目を、口縁下に刻目突帯を施す。板付II式中段階に位置づけられる。

#### SU-040 (102~126)

102~104は小型の壺である。103は肩部に貝殻施文による斜線文を、104は有軸の羽状文を施す。胴部最大径は中位にある。105~109は有文の壺胴部である。105は貝殻施文による無軸の羽状文、106は6条の沈線、107は斜格子目文、108、109はヘラ描きによる斜線文を施す。110~121は壺Aである。118を除いて、口唇下端に刻目を施す。114~118は口縁下に沈線を施す。119~120は口縁下に刻目突帯を施す。122~126は壺底部である。板付II式中段階に位置づけられる。

#### 貯藏穴出土石製品 (Fig.15)

##### SU-041 (127~133)

127~129は壺口縁である。127は口縁外面に、128、129は口縁内外面に粘土を貼り付けて段を付ける。130は壺Aである。口唇下端に刻目を施す。131は壺底部である。132は鉢Aである。133は直口縁の鉢である。板付II式占段階~中段階に位置づけられる。

##### SU-037 (134~136)

037からは柱状片刃石斧、砥石、紡錘車が出上した。この他、黒曜石剝片、安山岩剝片等があ

る。134は柱状片刃石斧で、刃部は欠損している。135は砥石で、4面を研ぎで使用している。

136は滑石製の紡錘車である。直径5.0cm、重さ48gを測る。

#### SU-039 (137-145)

039からは石包丁、蛤刃石斧、磨製石鎌、管玉、石錐、磨石が出土した。この他、黒曜石剥片、安山岩剥片等がある。137は石包丁である。刃部はほとんど欠損している。139-140は今山産玄武岩製の蛤刃石斧である。いずれも刃部は欠損している。141は頁岩製の磨製石鎌である。基部は直線的に仕上げられる。両面に浅い溝がある。142は碧玉製の管玉である。143-145は円環の縁片を打ち砕いた石錐である。重さは146g、74g、210gを測る。

#### SU-040 (146)

040からは石錐、黒曜石剥片、安山岩剥片等が出土した。146は円環の縁片を打ち砕いた石錐である。重さは140gを測る。

#### 土器片利用円盤

土器の周縁を打ち砕いて成形したもので、各貯藏穴から合計15個出土した。使用している土器は甕、壺がある。

Tab. 4 土器利用円盤類収表

種別番号	出土遺物	遺物の特徴 (mm/g)					遺物登録番号	
		遺存状態	直徑	厚さ	重量	利用器種		
1	37	略完	46~50	6~8	26	甕	胸部 周辺の大半を擦る	1182
2	38	略完	35~38	8	24	甕	胸部 周辺の全周を擦る	1183
3	38	略完	45~53	9~11	36	甕	胸部 周辺の一部を擦る	1184
4	38	略完	60~73	11~13	52	甕	周辺の大半を擦る	1185
5	39	略完	45~55	5~8	24	甕	周辺の一部を擦る	1194
6	39	略完	55~64	9~12	52	甕	周辺の全周を擦る	1195
7	39	略完	45~55	5~7	26	壺	周辺の一部を擦る	1196
8	39	略完	36~44	5~7	16	壺	周辺の大半を擦る	1197
9	39	略完	32~39	6~7	13	甕	周辺の大半を擦る	1198
10	40	略完	36~46	9~11	25	壺	周辺の大半を擦る	1204
11	40	略完	36~40	6~8	16	甕	周辺の一部を擦る	1205
12	40	略完	40~45	8~9	22	甕	周辺の大半を擦る	1206
13	40	略完	44~46	9~10	30	壺	周辺の大半を擦る	1207
14	41	略完	32~36	7~9	15	甕	周辺の一部を擦る	1208
15	41	略完	35~44	7	20	甕	周辺の一部を擦る	1209

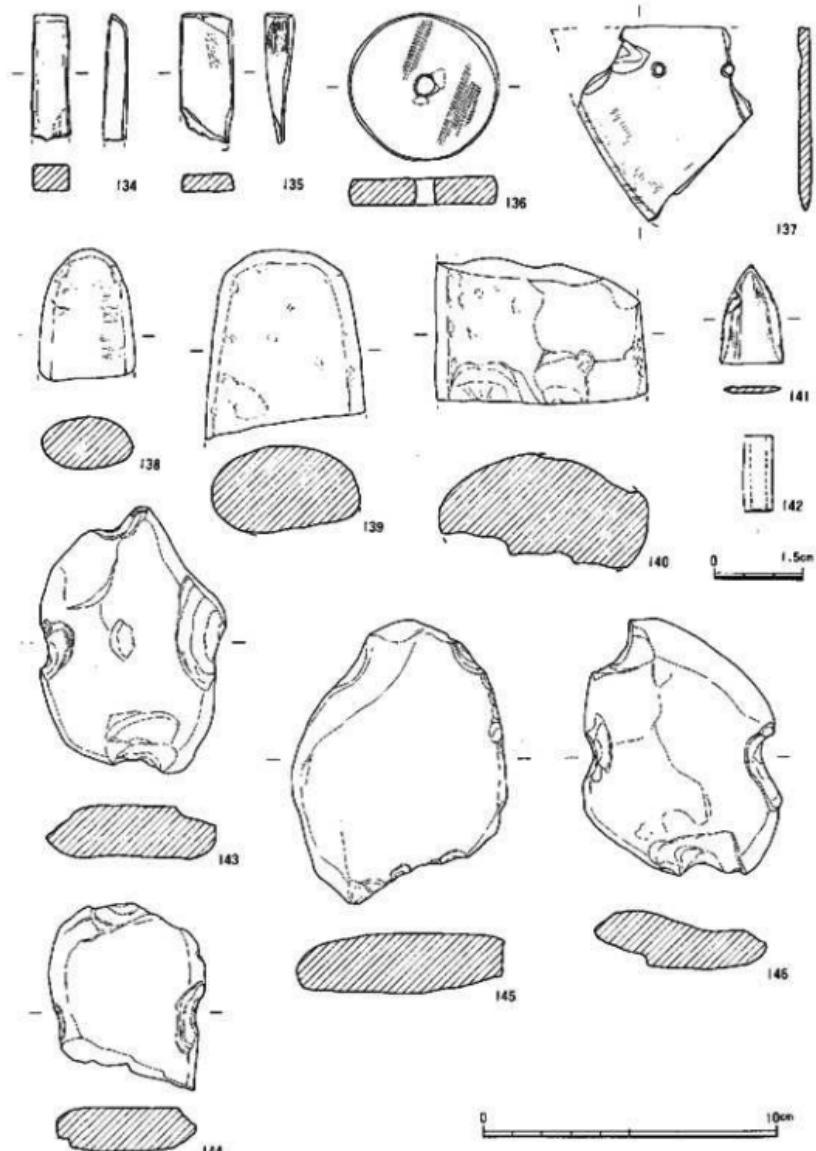


Fig.15 貯藏穴(SU)出土石製品実測図(1/2、1/1)

Tab. 5 出土土器観察表

番号	出土遺構	器形	造形状態	器高・cm	口・底径	遺物の特徴	
						外観	内観
1	SU-037	壺	完形	29.6	18.6・9.3	外面はヘラミガキ、内面はナデ、肩部に無軸羽状文あり	
2			完形	33.9	15.7・9.4	外面はヘラミガキ、内面は腹部はヘラミガキ、以下ナデ、肩部に3条沈線	
3			口縁	-	-	外面は、ヘラミガキ、内面はヘラミガキ	
4			口縁～頸部	-	-	外面はハケメ後ヘラミガキ、内面はナデ	
5			口縁～頸部	-	-	外面はハケメ後ナデ、内面はナデ	
6		壺	口縁～肩部下半	-	22.0	外面は縦方向のハケメ、内面はナデ、指頭痕あり	
7			口縁～肩部下半	-	22.8	外面は縦方向の長いハケメ、内面はナデ、指頭痕あり	
8			口縁	-	-	外面はナデ、内面は横方向のハケメ後ナデ	
9			口縁	-	-	外面はナデ、内面はナデ、指頭痕あり	
10			口縁	-	-	外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のハケメ	
11			口縁	-	-	外面はナデ、内面は横方向のハケメ	
12			口縁	-	-	外面はナデ、内面はナデ、1条沈線	
13			口縁	-	-	外面はナデ、内面はナデ、指頭痕あり	
14			口縁	-	-	外面はナデ、内面はナデ	
15			底部	-	6.9	外面はナデ、内面はナデ	
16			底部	-	8.0	外面は縦方向のハケメ、指頭痕あり、内面はナデ	
17			底部	-	7.4	外面は縦方向のハケメ、内面はナデ	
18			底部	-	7.6	外面は縦方向のハケメ、指頭痕あり、内面はナデ	
19			底部	-	7.2	外面は縦方向のハケメ、内面はナデ	
20	SU-038	壺	口縁	-	-	内外面ともヨコナデ	
21			口縁	-	-	内外面ともヨコナデ	
22			口縁	-	-	内外面ともヨコナデ	
23			口縁	-	-	外面は縦方向のハケメ、内面はナデ	
24			口縁	-	-	内外面ともヨコナデ	
25			口縁	-	-	内外面ともヨコナデ	
26			肩部(有文)	-	-	外面はヘラミガキ、内面はナデ、直弧文	
27			肩部(有文)	-	-	外面はヘラミガキ、内面はヘラミガキ、直弧文	
28			肩部(有文)	-	-	外面はヘラミガキ、内面はナデ、指頭痕あり、山形文	
29			肩部(有文)	-	-	外面はヘラミガキ、内面はナデ、無軸羽状文	
30			肩部(有文)	-	-	外面はヘラミガキ、内面はナデ、無軸羽状文	
31			底部	-	6.8	外面はヘラミガキ、内面はヘラミガキ	
32			底部	-	12.8	内外面ともナデ	
33			底部	-	11.0	内外面ともナデ	
34		甕	口縁	-	-	外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のハケメ後ナデ	
35			口縁	-	-	外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のハケメ後ナデ	
36			口縁	-	-	外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のハケメ後ナデ	
37			口縁	-	-	外面は縦方向の長いハケメ、内面は横方向のハケメ後ナデ	
38			口縁	-	-	外面はナデ、内面はナデ	
39			口縁	-	-	外面は縦方向のハケメ、内面はナデ、沈線1条	
40			口縁	-	-	外面は縦方向のハケメ後ナデ、内面は横方向のハケメ後ナデ	
41			口縁	-	-	外面はナデ、内面はナデ	
42			口縁	-	-	外面はナデ、内面はナデ	
43			口縁	-	-	外面はナデ、内面は横方向のハケメ	
44			口縁	-	-	外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のハケメ後ナデ	
45			口縁	-	-	外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のハケメ後ナデ	

番号	出土遺構	器形	遺存状態	器高・cm	口・底径	遺物の特徴
46	SU-038	甕	口縁	—	—	内外面ともヨコナデ
47		底部	—	8.4	外面は縱方向のハケメ、内面はナデ、底面に穿孔	
48		底部	—	7.2	外面は縱方向のハケメ、内面はナデ	
49		鉢	口縁	—	外面は削過底、内面はヘラミガキ、波状の口縁、縞文か	
50		高杯	口縁	—	内外面ともヘラミガキ	
51		脚部	—	—	外面はヘラミガキ、内面はしばり痕、突帯が剥落	
52	SU-039上	甕	口縁	—	—	外面ともヘラミガキ、一部ハケメが残る
53		口縁	—	—	外面ともヘラミガキ	
54		口縁	—	—	外面ともヘラミガキ	
55		底部	—	—	外面はヘラミガキ、内面はハケメ	
56		甕	口縁	—	—	外面ともヨコナデ
57		口縁	—	—	外面は縱方向の粗いハケメ、内面はナデ	
58		口縁	—	—	外面はハケメ後ナデ、内面はナデ、指頭痕が残る	
59		口縁	—	—	外面はハケメ後ナデ、内面はナデ、指頭痕が残る	
60		口縁	—	—	外面はハケメ後ナデ、内面はナデ、指頭痕が残る	
61		口縁	—	—	外面は縱方向のハケメ、内面はナデ	
62		口縁	—	—	外面は縱方向のハケメ、内面はナデ	
63		口縁	—	—	外面ともヨコナデ	
64		口縁	—	—	外面ともヨコナデ	
65		底部	—	8.0	外面は縱方向のハケメ、内面はナデ	
66		底部	—	6.9	外面は縱方向のハケメ、内面はナデ	
67	SU-039下	甕	口縁	—	—	外面ともヨコナデ
68		口縁	—	—	外面ともヨコナデ	
69		口縁	—	—	外面ともヨコナデ	
70		口縁	—	19.2	外面はヨコナデ、内面はヘラミガキ	
71		口縁	—	—	外面ともヨコナデ、口縁上端はヘラミガキ	
72		口縁	—	11.2	外面ともヨコナデ	
73		口縁	—	13.6	外面はヨコナデ、内面はヘラミガキ	
74		口縁～底部	—	17.3-12.5	口縁以外面ともヨコナデ、割部はヘラミガキ、内面はハケメ、縞文	
75		肩部	—	—	外面はナデ、内面はナデ、指頭痕が残る、有輪羽状文	
76		肩部	—	—	外面はナデ、内面はナデ、有輪羽状文	
77		肩部	—	—	外面はナデ、内面はナデ、沈線4条	
78		底部	—	8.2	外面はヘラミガキ、内面はナデ	
79		底部	—	8.7	外面はヘラミガキ、内面はナデ	
80		甕	口縁	—	外面は縱方向のハケメ、内面はナデ	
81		口縁	—	—	外面ともヨコナデ	
82		口縁	—	—	外面は縱方向のハケメ、内面は横方向のハケメ後ナデ、沈線1条	
83		口縁	—	—	外面は縱方向のハケメ、内面はナデ	
84		口縁	—	—	外面ともヨコナデ	
85		口縁	—	—	外面は縱方向のハケメ、内面はナデ	
86		口縁	—	—	外面は縱方向のハケメ、内面はナデ	
87		口縁	—	—	外面は縱方向のハケメ、内面はナデ、指頭痕が残る	
88		完形	—	26.8	23.6-7.6	外面は縱方向のハケメ、内面はナデ
89		完形	—	26.9	23.7-7.6	外面は縱方向のハケメ、内面はナデ、沈線1条
90		口縁～脚部下半	—	—	24.1	外面は縱方向のハケメ、内面はナデ、沈線1条

番号	出土遺構	器形	遺存状態	器高・cm	口・底径	遺物の特徴
91	SL-039下	甕	口縁	—	25.7	口縁はヨコナデ、外面は縱方向のハケメ、内面はナデ、指頭痕が残る
92		口縁	—	—	—	外面は縱方向のハケメ、内面はナデ
93		口縁	—	—	—	内外面ともヨコナデ
94		底部	—	5.6	—	外面は縱方向のハケメ、内面はナデ
95		底部	—	6.9	—	外面は縱方向のハケメ、内面はナデ
96		底部	—	8.1	—	外面は縱方向のハケメ、指頭痕が残る、内面はナデ、外面に柳正痕
97		口縁	—	—	—	内外面ともヨコナデ
98		口縁	—	—	—	内外面ともヨコナデ
99		全体の1/2残存	—	13.5	23.6-7.9	外面ともナデ、底部に指頭痕が残る
100		全体の1/2残存	—	14.7	21.5-7.8	外面はヘラミガキ、内面はナデ、腹部下半に穿孔
101	SU-040	口縁-腹部下半	—	44.8	—	口縁はヨコナデ、外面はヘラミガキ、内面は上半はヘラミガキ
102		甕	口縁	—	—	口縁はヨコナデ
103		肩部-底部	—	4.8	—	外面ともナデ
104		完形	—	23.5	13.4-7.8	口縁はナデ、外面はヘラミガキ、内面はナデ
105		肩部(有文)	—	—	—	外面はヘラミガキ、内面はナデ、指頭痕が残る、貝没羽状文
106		肩部(有文)	—	—	—	外面はヘラミガキ、内面はナデ、指頭痕が残る、沈縫6条
107		肩部(有文)	—	—	—	外面はヘラミガキ、内面はナデ、指頭痕が残る、格子目文
108		肩部(有文)	—	—	—	外面はヘラミガキ、内面はナデ、羽状文
109		肩部(有文)	—	—	—	外面はヘラミガキ、内面はナデ、羽状文
110		甕	口縁	—	—	外面ともヨコナデ
111		口縁	—	—	—	外面はハケメ、内面はナデ
112		口縁	—	—	—	外面ともヨコナデ
113		口縁	—	—	—	外面はハケメ、内面はナデ
114		口縁	—	—	—	外面はハケメ、内面はナデ、沈縫1条
115		口縁	—	—	—	外面はハケメ、内面はナデ、沈縫1条
116		口縁	—	—	—	外面はハケメ、内面はナデ、沈縫1条
117		口縁	—	—	—	外面ともヨコナデ、沈縫1条
118		口縁-腹部	—	24.0	—	外面はハケメ、内面はナデ、沈縫1条
119		口縁	—	—	—	外面ともヨコナデ
120		口縁	—	—	—	外面ともヨコナデ
121	SU-041	口縁-腹部	—	32.7	—	外面はハケメ、内面はナデ
122		底部	—	8.0	—	外面はハケメ、内面はナデ
123		底部	—	7.0	—	外面はハケメ、内面はナデ、指頭痕が残る
124		底部	—	7.1	—	外面はハケメ、内面はナデ
125		底部	—	7.7	—	外面はハケメ、内面はナデ
126		底部	—	5.8	—	外面ともナデ
127	SU-041	甕	口縁	—	—	外面はヘラミガキ、内面はナデ、口縁はヘラミガキ、指頭痕が残る
128		口縁	—	—	—	外面はヘラミガキ、内面はヘラミガキ
129		口縁	—	—	—	外面はヘラミガキ、内面はヘラミガキ
130		甕	口縁	—	—	外面はハケメ、内面はナデ
131		底部	—	—	—	外面ともナデ
132		口縁	—	—	—	外面はヘラミガキ、内面はヘラミガキ
133		全体の1/2残存	—	11.5	20.4-7.5	外面はヘラミガキ、内面はナデ、口縁はヘラミガキ、指頭痕が残る

### 3. 小結

今回の調査では弥生時代前期の貯蔵穴を5基検出した。造構は削平のため、遺存状況はあまり良くなく、深さ50~90cm程が残存する。平面形は橢円形、円形があり、断面は袋状を呈するものが多い。造構の切り合ひはほとんど無く、おそらく廃絶・埋没後しばらく壅みとして残ったため、それを避けて新たな貯蔵穴を造ったと考えられる。時期は前回報告分と同様、弥生時代前期中葉から末葉の幅をもつ。しかし、SU-037からは前回分では少なかった前期末~中期初頭に位置づけられる資料が出土している。壺は口縁、肩部に段は無く、突帯や沈線が巡る。1は胸部上半に最大径がくる肩の張る壺で羽状文を施す。甕は如意形口縁(甕A)が大半を占めるが、逆L字形口縁(甕B)も若干見られる。底部片を見ると、裾が聞く厚底のものが少量ながらあり、中期的様相をもつ。SU-037出土土器は前回分を含めて、最も新しい様相をもつ資料である。これ以後、貯蔵穴が造られ続けたかは今後の調査が待たれる。

前回調査分に今回の5基を加えると、この地点で検出された貯蔵穴は34基となる。貯蔵穴は南側の第31次調査地点でも検出されており、南北に広い分布を示している。おそらく周辺にはまだ数十基の貯蔵穴が存在するものと考えられる。前回の報告でも触れたが、比恵遺跡群には弥生前期の造構の分布は主に北台地と西台地にあり、近年の調査例が多い北台地ではIH地形、造構の分布等が徐々に判明しつつある。北台地の第30、31、37次調査地点は貯蔵穴が群集する集落の貯蔵区域と考えられ、北側にある居住区域と分離して存在している。両者を分離して集落を形成する状況は板付遺跡や葛川遺跡などで見られるが、両者の様相が明らかなものは少ない。その意味で、今後の調査で両者の領域を明らかにし、更に墓域や水田などを検出することで集落の構造を明確にすることが重要な課題と言えよう。

## 第4章 第39次調査の報告

### 1. 調査の概要

1991年（平成3年）9月20日、中村俊治氏より、埋蔵文化財事前審査願いが提出され、同年10月2日に試掘調査を行った。その結果、弥生時代中期の土器が多数出土し、竪穴住居跡や溝と考えられる遺構を検出した。その成果を基に地権者と協議を重ね、現状での保存、設計変更等が困難ということになり、記録保存のための発掘調査を行うこととなった。

本調査地点は、比恵遺跡群の中央部に位置し、東側50mに第7次、13次、27次調査が行われている。調査前の標高は約6.0～6.3mを測る。周囲の道路面と比較すると30～50cm高い。

調査は約20～30cmの客土を重機で除去したのちに行った。客土を除去すると、地山の鳥栖ロームとなり、その面を遺構面として検出作業を行った。遺構面の標高は約5.8mである。

遺構は弥生時代中期～後期の竪穴住居跡9軒、土坑3基、古墳時代前期の土坑1基、後期の塚1条、掘立柱建物2棟を検出した。



Fig. 16 第39次調査地点位置図(1/1000)

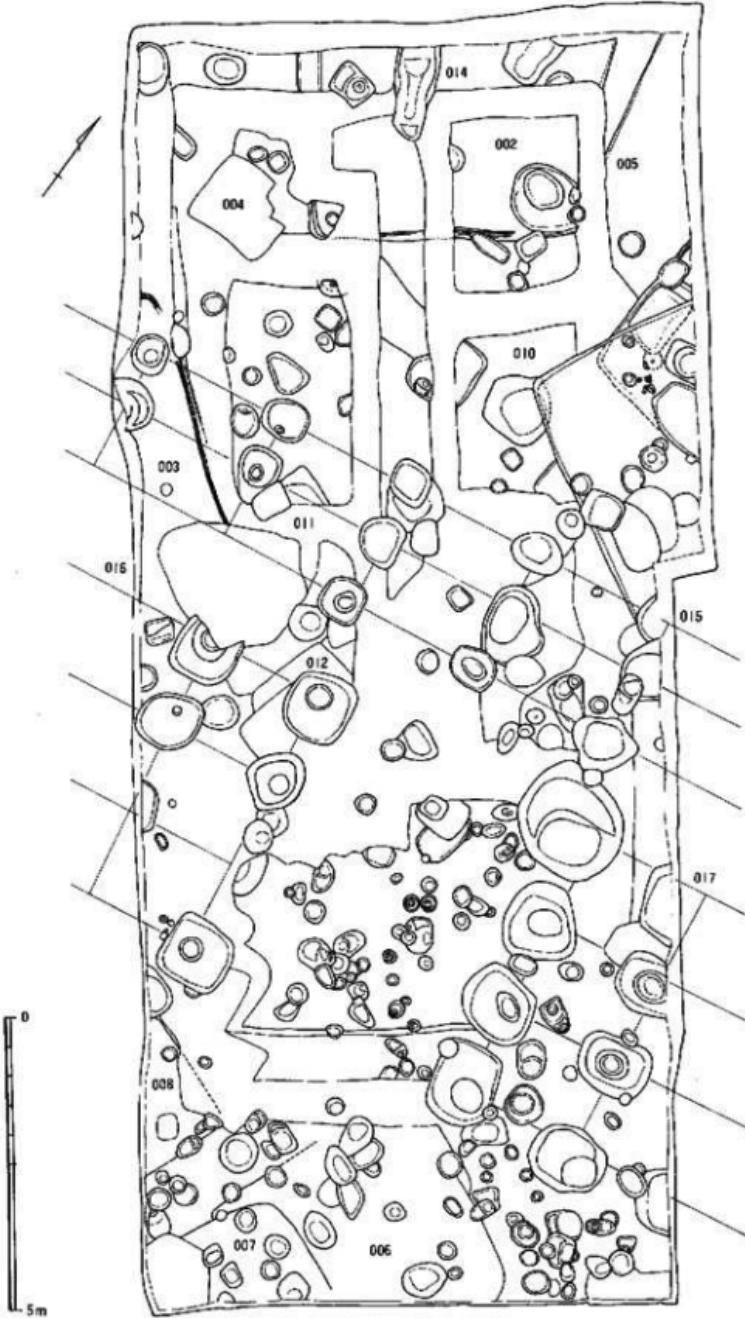


Fig.17 第39次調査地点遺構配置図(1/100)

## 2. 調査の記録

### 1) 壺穴住居跡 (SC)

今回の調査では8軒の壺穴住居跡を検出した。しかし、以前あった建物の基礎による擾乱と調査区が狭いため、遺存状況は悪く、いずれも住居跡の一部を検出したに過ぎない。従って、住居跡の平面形や主柱穴等不明確な所が多い。住居跡は調査区北側と南側に分布する。SC-001と005と009、SC-006と007は切り合っている。平面形は方形もしくは隅丸方形を呈する。これらの壺穴住居跡の時期は近接しており、弥生時代中期後半から後期に位置づけられるものである。

#### SC-001 (Fig.19)

調査区北側に位置し、SC-009を切る。平面形は方形を呈し、1片5m程の規模が推測される。深さ30cmが残存する。主柱穴は不明である。遺物は埋土から弥生土器、鉄鏃、やりがんな、ガラス小玉が出土した。時期は弥生時代中期末～後期前半に位置づけられる。

#### 出土遺物 (1~11)

1は直口壺である。口縁は直線的に立ち上がり、胴部最大径は中位にある。調整は外面は縦方向のハケメ、内面はナデで、頸部と胴部中位に半度の継ぎ目が見られる。口径7.6cmを測る。2~5は壺である。口縁はくの字もしくは逆

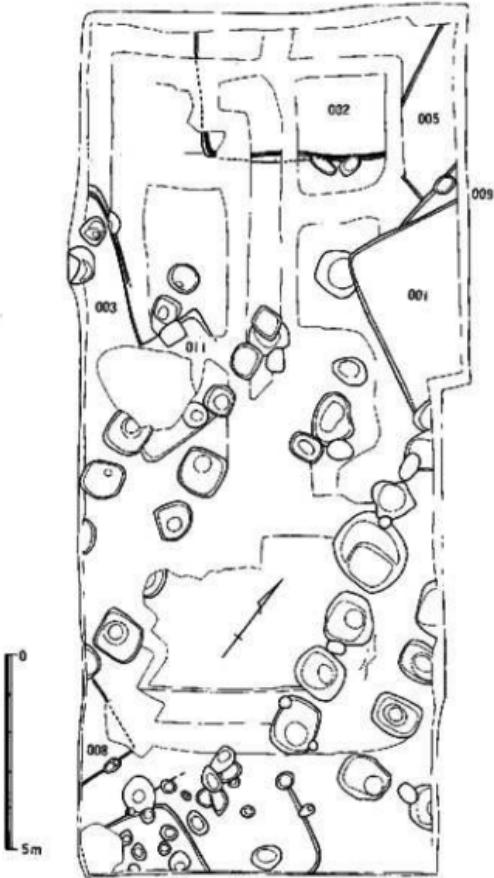


Fig.18 壺穴住居跡遺構配置図(1/150)

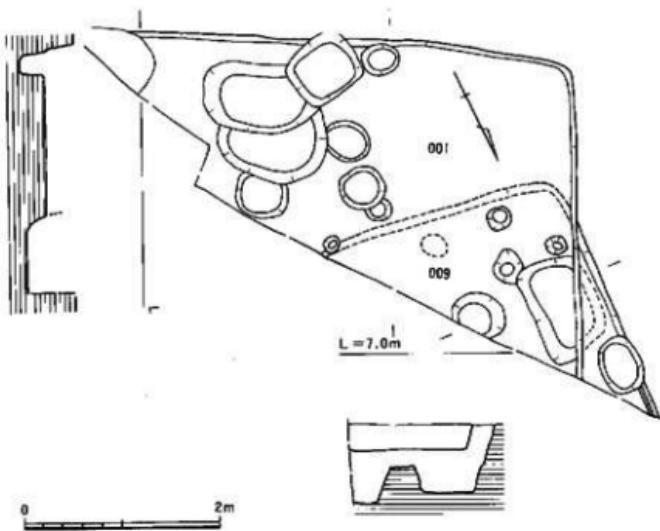


Fig.19 SC-001、009透構実測図(1/60)

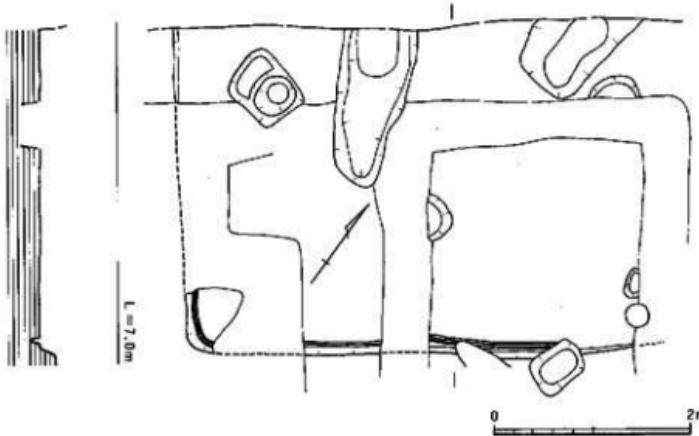


Fig.20 SC-002透構実測図(1/60)

L字形を呈する。5は口縁下に突帯を施す。6は鉢である。7は板付口式の甕口縁である。口唇下端に刻目を、口縁下には沈線を施す。混入と考えられるが、比恵遺跡群の中央部では出土量は非常に少ない。8、9は鉄錐である。10はやりがんなである。11はガラス小玉である。直径4mmを測る。

#### SC-002 (Fig.20)

調査区北側に位置する。平面形は方形を呈し、1片5m程の規模が推測される。深さ20cmが残存する。主柱穴は不明である。住居の東側には炭、焼土を多く含む土坑があり、炉と考えられる。壁には幅15~20cmの壁溝が巡る。遺物は埋土から弥生土器、石器が出土した。時期は弥生時代中期後半に位置づけられる。

#### 出土遺物（12~16）

12、13は甕である。口縁は逆L字形を呈する。14、15は高壺である。器面には赤色顔料が塗られる。16は偏平片刃石斧である。石材は安山岩である。長さ7.0cm、幅4.4cm、厚さ1.1cmを測る。

#### SC-003 (Fig.18)

調査区北西側に位置する。平面形は方形を呈し、1片5m程の規模が推測される。遺存状況は悪く、壁溝が残存するのみである。主柱穴は不明である。遺物は埋土から弥生土器が出土した。時期は弥生時代中期後半に位置づけられる。

#### 出土遺物（17~22）

17~20は甕である。口縁はくの字もしくは逆L字形を呈する。21は広口壺口縁である。22は袋状口縁甕である。器面には赤色顔料が塗られる。

#### SC-005 (Fig.18)

調査区北側に位置し、SC-009に切られる。平面形は方形を呈する。遺存状況が悪く、規模は不明である。5~10cmが残存する。主柱穴は不明である。遺物は埋土から弥生土器が出土した。時期は弥生時代中期後半に位置づけられる。

#### 出土遺物（23）

23は甕口縁である。逆L字形を呈する。

#### SC-006 (Fig.22)

調査区南側に位置し、SC-007に切られる。平面形は隅丸方形を呈し、1片4mを測る。深さ30cmが残存する。主柱穴は4本と考えられる。遺物は埋土から弥生土器が出土した。時期は弥生時代中期中葉~後半に位置づけられる。

#### 出土遺物（24~30）

24~28は甕である。口縁は逆L字形を呈する。25、26は口縁下に突帯を施す。28は丸みを帯びた体部で、器面には暗文を施す。29、30は広口壺である。29は鋤先口縁である。30は外面に暗

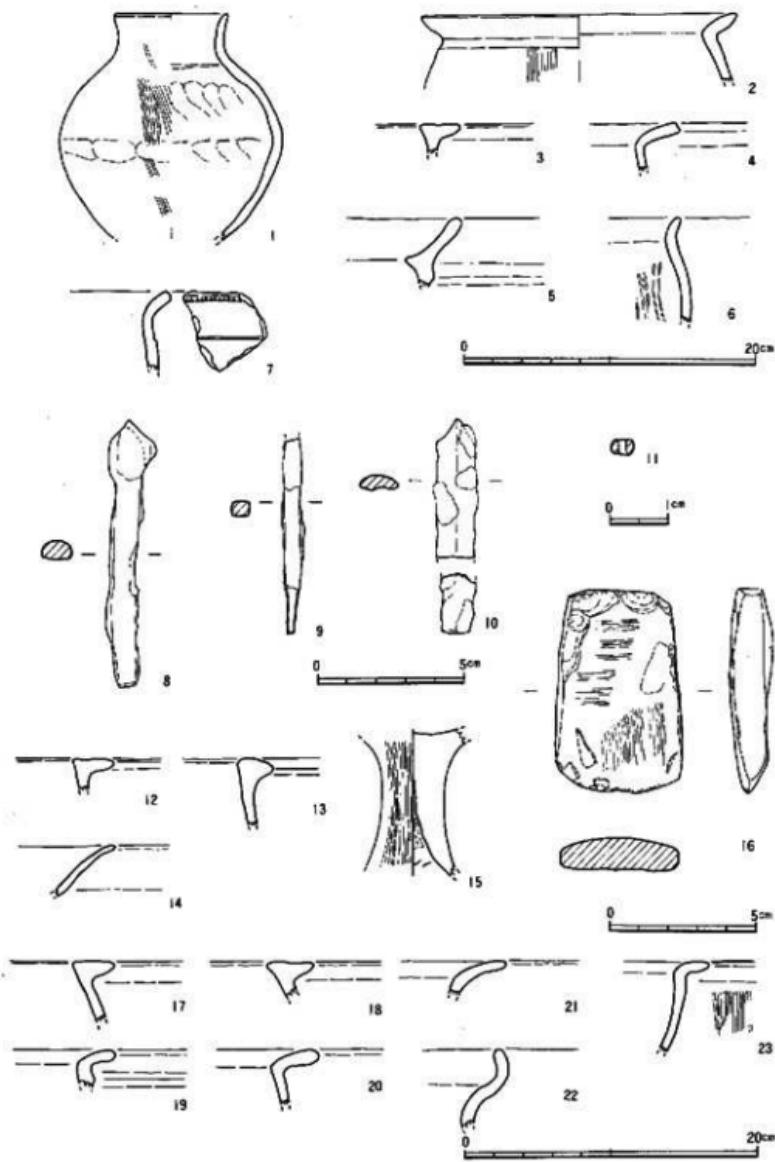


Fig.21 壇穴住居跡(SC)出土遺物実測図 1(1/4, 1/2, 1/1)

文を施す。

#### SC-007 (Fig.22)

調査区南側に位置し、SC-006を切る。平面形は隅丸方形を呈す。住居跡のコーナー部分のみで規模は不明である。深さ30cmが残存する。主柱穴は不明である。遺物は埋土から弥生土器、石包丁等が出土した。時期は弥生時代中期中葉～後半に位置づけられる。

#### 出土遺物 (31～34)

31～33は甕である。口縁は逆L字形を呈する。34は石包丁の未製品で、穿孔の途中である。器面の風化が著しい。石材は粘板岩である。

#### SC-008 (Fig.18)

調査区南側に位置し、平面形は方形を呈する。住居跡のコーナー部分のみで、規模や主柱穴は不明である。深さ20cmが残存する。遺物は埋土から弥生土器等が出土した。時期は弥生時代中期後半に位置づけられる。

#### 出土遺物 (35、36)

35は甕である。口縁はT字形を呈する。36は壺で、鋸先口縁である。

#### SC-009 (Fig.19)

調査区北側に位置し、SC-001に切られ、SC-005を切る。平面形は方形を呈する。住居跡のコーナー部分のみで、規模、主柱穴は不明である。住居のコーナー付近で1.1×0.7m、深さ0.25mの土坑を検出した。深さ40cmが残存する。遺物は埋土から弥生土器等を検出した。時期は弥生時代中期後半に位置づけられる。

#### 出土遺物 (37、38)

37、38は甕である。37はくの字形を、38は直口縁である。

#### SC-011 (Fig.18)

調査区北西側に位置する。平面形は方形を

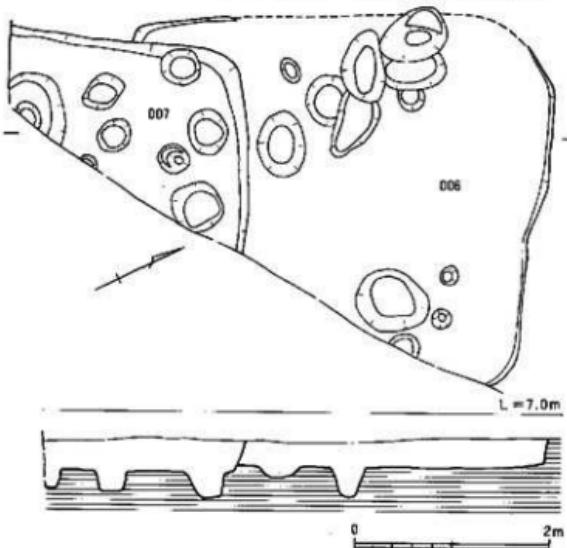


Fig.22 SC-006, 007遺構実測図 (1/60)

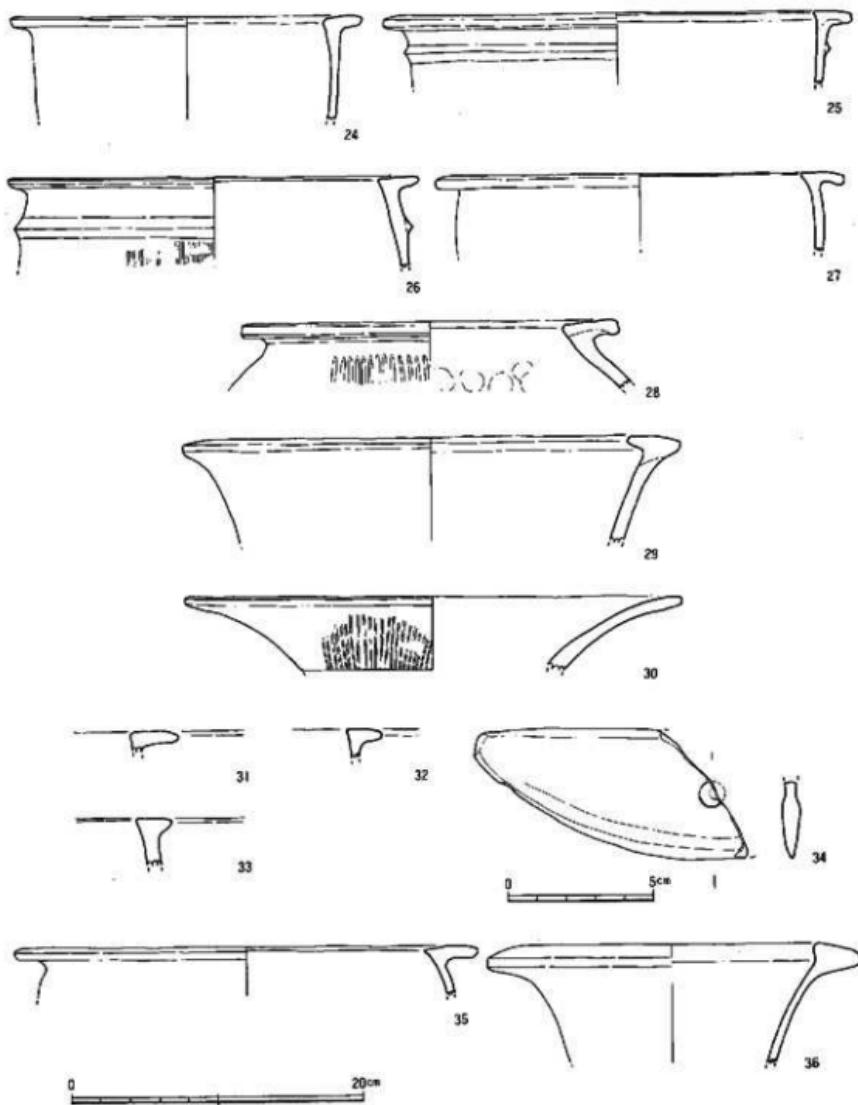


Fig.23 壬穴住居跡(SC)出土遺物実測図 2 (1/4、1/2)

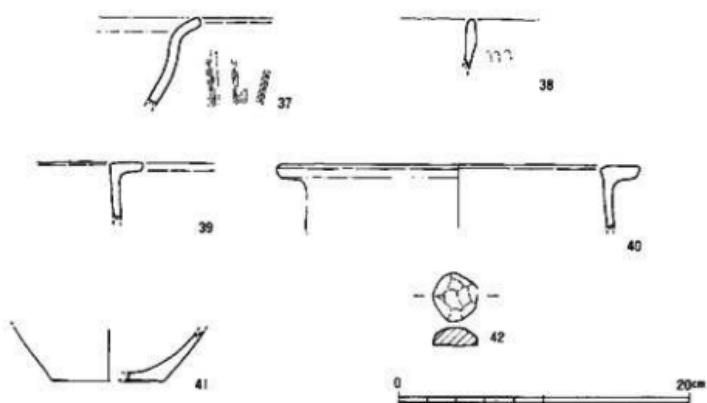


Fig.24 壁穴住居跡(SC)出土遺物実測図3(1/4)

呈する。遺存状況は非常に悪く、主柱穴は不明である。規模は1片3mを測る。深さ10cmが残存する。遺物は壇上から弥生土器、土製円盤等が出土した。時期は弥生時代中期後半に位置づけられる。

#### 出土遺物(39~42)

39~40は壺である。口縁は逆L字形を呈する。41は壺底部である。42は土製円盤で、器面の一方には指頭痕を残す。もう一方はナデで平坦に仕上げる。直径約3cmを測る。

## 2) 土坑 (SK)

本調査地点では4基の土坑を検出した。土坑のほとんどが調査区北側に分布する。

### SK-004 (Fig.25)

004は調査区北側に位置する。土坑の上面は後世の遺構に切られている。平面形は長方形を呈し、1.5m、幅0.8m、深さ0.95mを測る。主軸方位はN-80°-Eを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色粘質土とロームの互層となる。遺物は埋土から弥生土器、土師器、黒曜石剝片等が出土した。遺構の時期は古墳時代初頭に位置づけられる。

### 出土遺物 (43~45)

43は甕である。口縁は緩やかに外反する。肩はあまり張らず、胴部中位が最大径となると推測される。体部外面は粗い叩き目を施す。叩き目はやや右上がりである。内面は頭部は粘土の擦ぎ目で指頭痕が残る。胴部は横方向のハケメを施す。畿内第五様式系の甕の影響が伺える。口径10.4cmを測る。44は山陰系の二重口縁壺である。45は脚付甕もしくは鉢の脚部である。

### SK-010

010は調査区北側に位置し、SC-001に切られる。平面形は不整円形を呈する。直径1.15~1.2m、深さ0.7cmを測る。壁は開き気味に立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土である。遺物は埋土から弥生土器、石斧等が出土した。時期は弥生時代中期中葉に位置づけられる。

### 出土遺物 (49)

49は偏平片刃石斧である。平面形は左右非対称である。石材は凝灰岩である。長さ4.4cm、幅3.0cm、厚さ0.5cmを測る。

### SK-012 (Fig.25)

012は調査区中央にあり、SB-016のSP-0071に切られる。平面形は不整梢円形を呈し、長さ2.25m、幅1.3m、深さ0.75mを測る。主軸方位はN-25°-Wを測る。壁は開き気味に立ち上がる。埋土は黒褐色粘質土とロームの互層となる。遺物は黒褐色粘質土中から弥生土器、黒曜石剝片等が出土した。時期は弥生時代中期後半に位置づけられる。

### 出土遺物 (46、47)

46は甕である。口縁は緩やかに外反し、片部は撫で肩である。胴部中位より下に最大径がある。頭部と肩部にはそれぞれ3条、2条の沈線が巡る。調整は頭部には縱方向のミカキを施す。口径16cmを測る。47は甕である。口縁は逆L字形を呈する。口縁下には突唇が付く。口径29.6cmを測る。

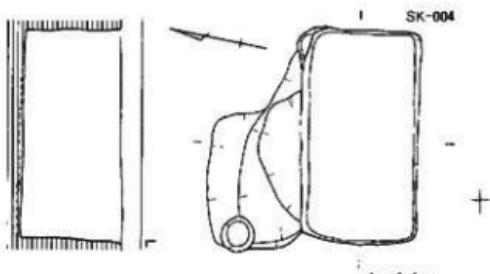
### SK-014

調査区北端にあり、北側に遺構は広がる。SC-002を切る。平面形は不整梢円形で長さ1.75m、幅0.8m、深さ1.0mを測る。埋土は暗褐色粘質土である。遺物は埋土から弥生土器、黒曜石

剝片等が出土した。時期は弥生時代後期に位置づけられる。

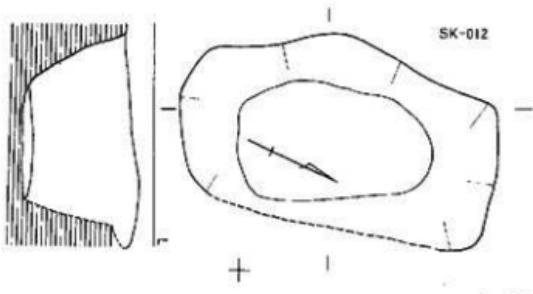
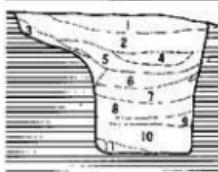
#### 出土遺物 (48)

48はミニチュア土器の鉢である。底部は上底気味である。



#### SK-004土層

1. 茶褐色粘土 (粗粒まじり)
2. ローム (茶褐色粘土まじり)
3. 始灰褐色粘土 (ローム少し含む)
4. 始灰褐色粘土 (ロームまじり)
5. ローム (始灰褐色粘土まじり)
6. 黒褐色粘土 (ロームまじり)
7. ローム (黒褐色粘土、粒状に少し含む)
8. 6と同じ
9. ローム (黒褐色粘土を少し含む)
10. 7と同じ
11. 6と同じ



#### SK-012二層

1. 黒色土
2. 赤褐色土
3. 始灰褐色土 (ローム粒子まじり)
4. 白色粘質土 (ローム粒子まじり)
5. 1と同じ
6. 黒色土 (ローム粒子、白色粘質土まじり)
7. 1と同じ
8. 1と同じ
9. 黑褐色土
10. 黑色土 (ローム粒子まじり)
11. 赤褐色土 (ロームまじり)
12. 1と同じ
13. 9と同じ
14. 白色粘質土
15. 14と同じ
16. 14と同じ
17. 9と同じ
18. 2と同じ
19. 白色粘質土 (ローム粒子少しまじる)
20. 2と同じ

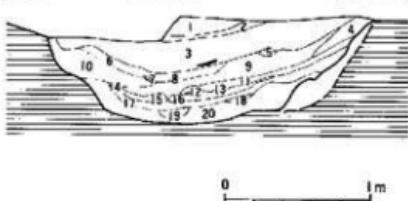
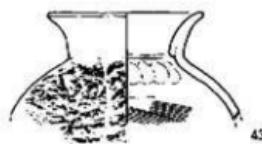
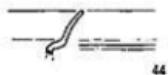


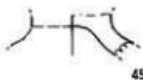
Fig.25 SK-004、012遺構実測図(1/40)



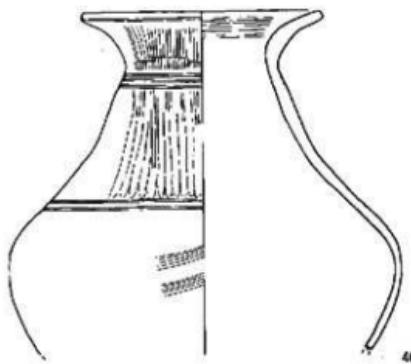
43



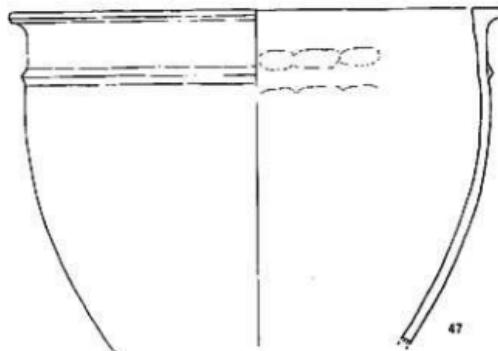
44



45



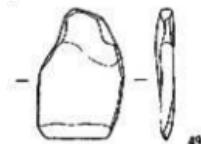
46



47



48



49



Fig.26 土坑(SK)出土遺物実測図(1/4、1/2)

### 3) 棚 (SA)、掘立柱建物跡 (SB)

今回の調査では200余りの柱穴を検出した。柱穴は調査区全域に分布する。そのうち、建物として復元できたのは3棟 (SA-015、SB-016、017) である。SA-015、SB-016、017は同一の方位、規模で、同時期の建物と考えられる。

#### SA-015 (Fig.27)

015は調査区中央に位置し、N-82°-Eの方位で東西方向に延びる。棚の構造は1辺0.6~1.2mの隅丸長方形の柱穴を南北方向に配置したものを一組としている。今回の調査では4間分、延長10mにわたって検出した。南北方向の柱間は1.0mと1.2m、東西方向の柱間は2.5mを測る。柱は掘り方のほぼ中央に据え、周囲を地山の鳥栖ロームと暗褐色粘質土で版築状に埋めていく。土層の観察からは柱は抜き取られたものが多いが、柱痕跡から推測される柱の径は20~30cmである。ほとんどが中央の柱は両側の柱より深く据えられている。遺物は弥生土器、古式土師器、須恵器、黒曜石剝片等が出土した。

#### 出土遺物 (51)

SP-0099から出土した。51は外來系の二重口縁の壺である。器面には赤色顔料が塗られている。外面には竹管による円形文を施す。奥山尚氏の砂礫の観察結果を記述すると、51の砂礫は流文岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、安山岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる。このような砂礫は山陰地方や加賀地方に見られる砂礫で、因幡か加賀南部が推定される。

#### SB-016 (Fig.27)

調査区中央西側に位置し、主軸方位はN-8°-Wを測る。擾乱のため、遺存状況は良くないが、7個、1×3間分を検出した。柱穴は1辺1.0~1.1mの隅丸方形プランで、深さ0.1~0.5mが残存する。柱間は梁行で1.6m、桁行で2.1m、SA-015との柱間は1.7mを測る。柱はSA-015と同様、柱を据えた後、版築状に埋めている。柱痕跡から推測される柱の径は30~40cmである。柱穴の底の柱の据わっていた部分は若干沈み込んでいるものもある。遺物は弥生土器、古式土師器、須恵器、黒曜石剝片等が出土した。

#### 出土遺物 (49、50)

49、50ともSP-0071の掘り方から出土した。49は須恵器壺である。口縁は内傾して短く立ち上がる。口縁端部は欠損しているが、ほぼ端部に近い。口径は12cm前後と推測する。底部は回転ヘラケズリである。色調は灰白色を呈する。50は腰窓部で、外面は格子目叩き、内面は同心円文叩である。色調は青灰色を呈する。

#### SB-017 (Fig.27)

調査区中央東側に位置する。柱筋はSB-016と一致し、主軸方位はN-8°-Wを測る。柱穴は9個、2×3間分を検出した。柱穴は1辺0.9~1.9mの隅丸長方形プランで、深さ0.3~0.6mが残

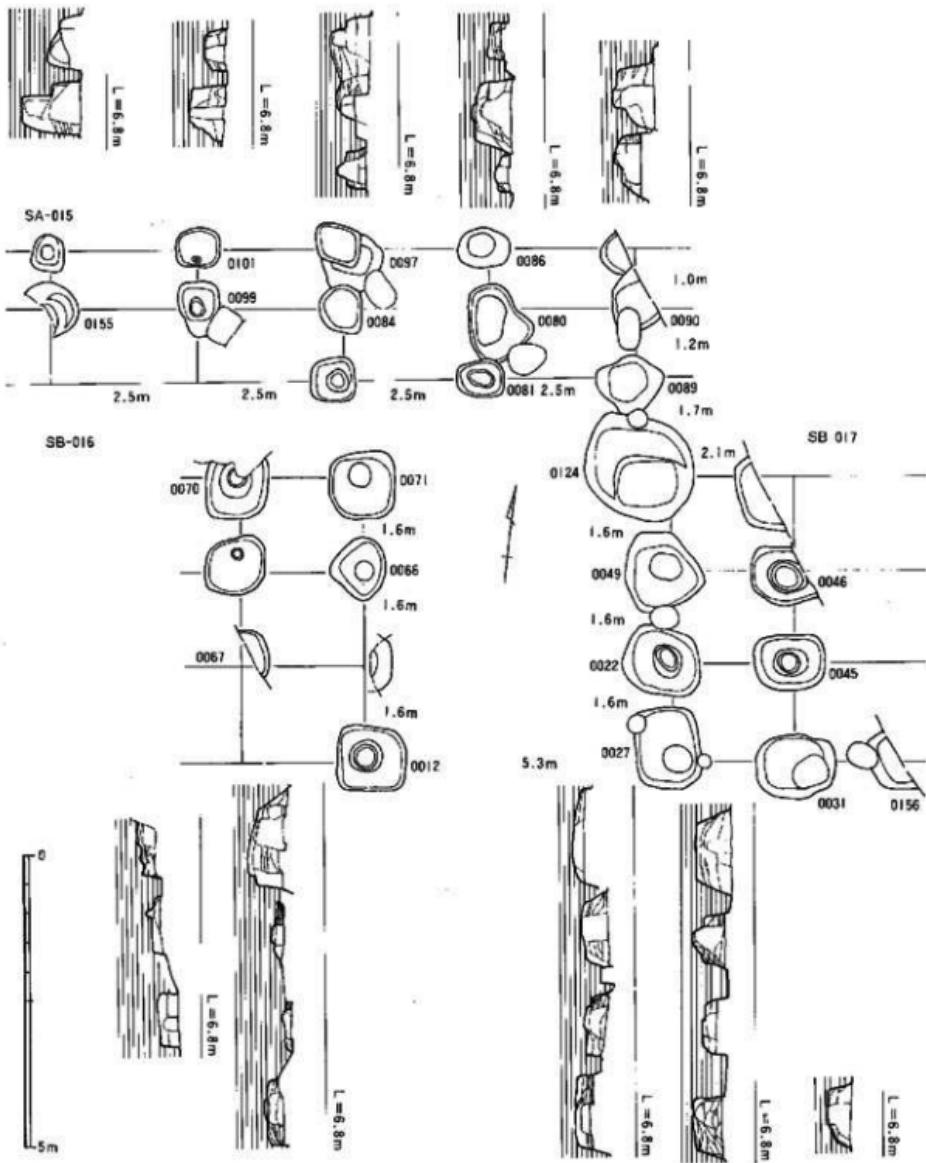


Fig.27 SA-015、SB-016、017造構実測図(1/100)

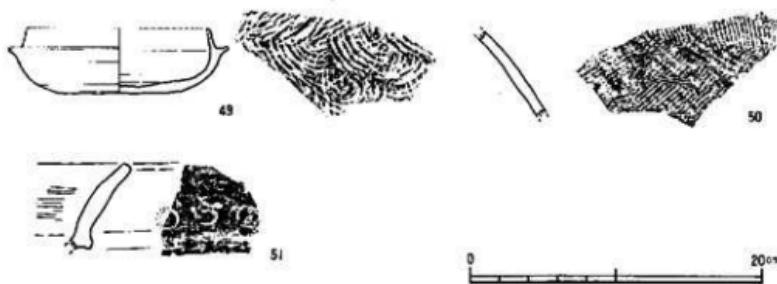


Fig.28 横(SA)、掘立柱建物跡(SB)出土遺物実測図(1/4)

存する。柱間は梁行で1.6m、桁行で2.1m、SA-015との柱間は1.7m、SB-016との柱間は5.3mを測る。柱はSA-015、SB-016と同様、柱を据えた後、版築状に埋めている。柱は抜き取られたものが多いため、柱痕跡から推測される柱の径は30~40cmである。柱穴の底の柱の据わっていた部分は若干沈み込んでいるものもある。遺物は弥生土器、古式土師器、須恵器、黒曜石剝片等が出士した。

SA-015、SB-016、017は規模、方位等から同時期の建物と考えられる。調査区が狭いため、規模、構造は不明確な部分が多いが、SB-016、017は3×3間の総柱建物で、規模は梁行4.8m、桁行6.3m、床面積約30m<sup>2</sup>と復元できる。時期はSB-016のSP-0071の掘り方出土の須恵器環が小田編年III B期に位置づけられることから、建物の上限を6世紀後半に求めることができる。下限の時期は明確な切り合い等が無いため、不明確だが、建物にはその後の建て替え等は認められず、長期にわたるものではなかったと考える。

### 3. 小結

今回の調査で検出した遺構は弥生時代の遺構は中期後半以降のものである。ただ、弥生時代前期末に位置づけられる土器も少量出土している。遺構には弥生時代中期～後期の堅穴住居跡9軒、上坑3基、古墳時代前期の土坑1基、後期の櫛1条、掘立柱建物2棟を検出した。

弥生時代の堅穴住居跡はいずれも方形プランを呈する。調査区が狭いため、遺構全体を調査できたものではなく、擾乱で削平をうけているものが多い。時期は弥生時代中期後半から後期前半におさまるものと考えられる。遺物は弥生土器の他、やりがんな、鐵鎌、ガラス玉等が出土した。土坑は円形、橢円形プランのものがある。

古墳時代後期の棚SA-015、建物SB-016、017は方位、規模等から同時期に位置づけられるものである。SA-015は3個の柱穴を南北方向に配置したものを一組として、東西方向に延びるものである。調査は4間、10m分を検出したが、更に東西方向に延びるものと予想される。柱間は柱の中心で2.5m、南北幅は2.2mを測る。SB-016、017はSA-015と同一方向の建物で、柱筋を揃えて東西方向に配置される。建物間の距離は5.3mを測る。1×3間、2×3間分を検出した。調査区が狭いため、全体を調査することはできなかったが、おそらく3×3間の総柱建物と考える。柱間は梁行1.6m、桁行2.1mを測る。それから復元される建物の規模は梁行長4.8m、桁行長6.3m、床面積約30m<sup>2</sup>と推測される。棚との距離は約1.7mで、非常に接近している。方位は磁北から約5°西に振れる。出土遺物から6世紀後半以降に位置づけられる。建物には建て替えた形跡は認められず、長期にわたるものではなかったと考える。

これまでに比恵遺跡群では同様の建物造構は第8次、第7・13次調査で検出されており、これらの建物は宣化元年(536)朱にある「那津官家」との関連が指摘されている。最近の調査で、隣接する那珂遺跡群でも大型建物造構が検出されており、次にそれらを含めて調査成果を概述していく。

#### 那珂、比恵遺跡群古代倉庫群について

那珂、比恵遺跡群は那珂川と御笠川に挟まれた洪積丘陵上に立地し、標高5~8mを測る。遺跡の範囲としては東西約1km、南北約2.5kmに両者は含まれる。遺跡の立地する低丘陵の縁辺や内部には狭い谷が幾つも入り込む。古墳時代の那珂川河口から2~3kmの位置にある。遺跡群は縄文時代晚期に集落形成が開始し、以後連続と集落は続いている。これまでの調査で古代の大型建物造構は5カ所で検出されている。以下、調査順に概略を述べていく。

#### 比恵遺跡群第7・13次調査(Fig.30)

遺跡群の中央北寄りに位置する。今回の調査地点の北東約100mにある。造構は2つの調査地点にわたって検出された。ここでは東西建物1棟とそれを挟むように棚2条が検出された。

SB-01は2×9間の東西棟建物である。桁行長26.6mを測るが、柱間は2.2~3.3mとばらつきが大きい。梁行長は西側3.1m、東側4mと差がある。柱の掘り方は1~1.3mの円形で、柱痕跡の径は30cm前後である。

SA-02はSB-01の南側の桁行と柱筋をそろえてとりついで北側に延びる。7間、20m分が検出されている。方位はN-2~3°-Eをとり、今回調査の建物方位と比べると7~8°東に振れる。棚は3m前後の布振りの掘り方に、東西方向の3本一組に柱を据えて、南北方向に延びる。3本の柱間は1.2m間隔である。南北方向の柱間は2.5~3.1mとばらつきがある。柱痕跡の径は20cm前後である。SA-03はSB-01の東側にとりついでSA-02と同様の在り方を示している。コの字に配列された建物の内部は造構は見られず、空白地となっている。北側は未調査であり、今後の調査で何らかの建物が検出されることが予想される。時期は良好な出土遺物がないため、

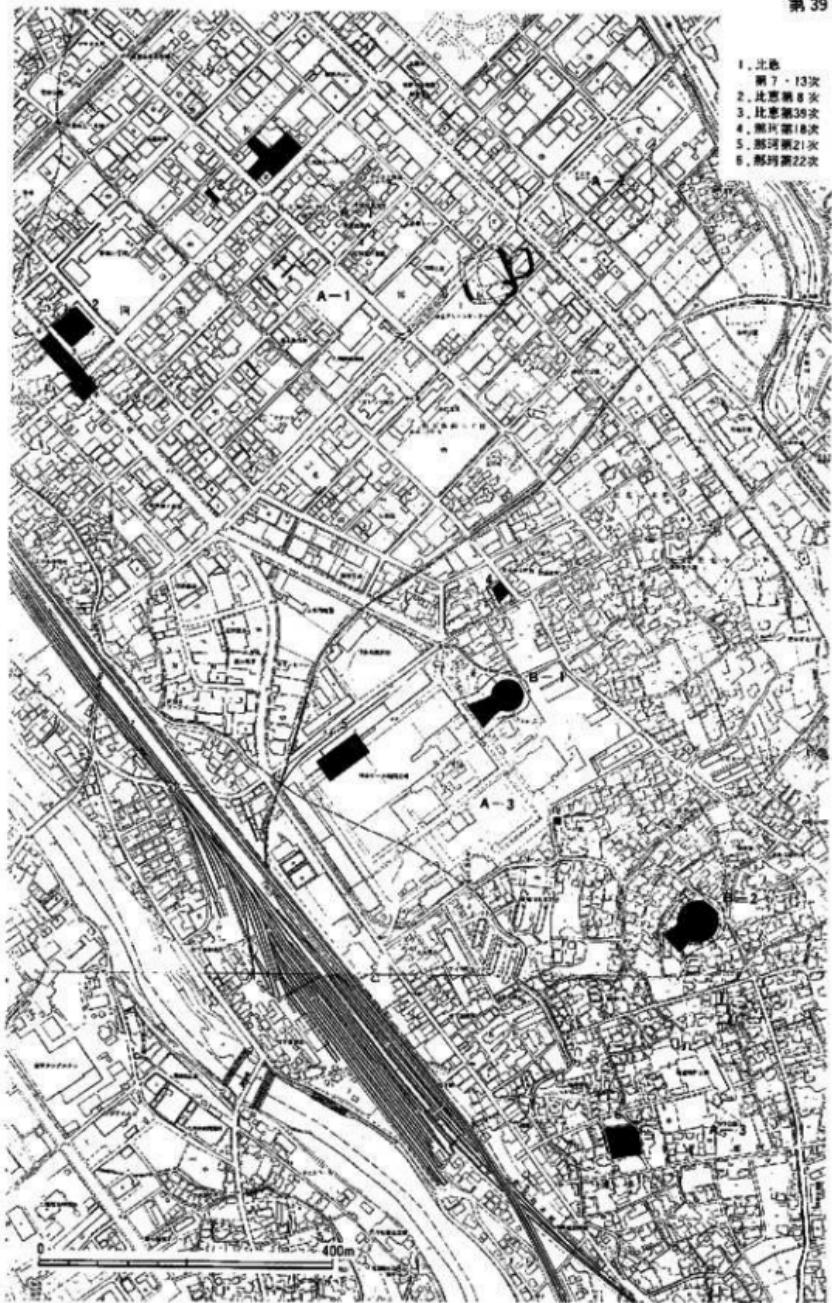


Fig.29 那珂・北恵遺跡群古代倉庫群分布(1/8000)

決め手を欠くが、6世紀前半まで遡ることはなく、6世紀後半～7世紀代の建物と考えられている。

#### 比恵遺跡群第8次調査 (Fig.31)

遺跡群の北西端に位置する。今回の調査地点の北西約250mにある。第8次調査地点と第7・13次調査地点との間には狭い谷が入っており、西側にある第8次調査地点が立地する台地は東西幅約200～300mで、北西方向に延びる狭いものである。ここでは造構は棚1条、総柱建物7棟が検出された。

SA-091は調査区北側にあり、前述のSA-02、03同様、布振りの掘り方に3本の柱を据えたものを1組にしてN-36°-Bで北東～南西方向に延びる。12間37.2m分が検出されている。3本の柱間は1.2m間隔である。東西方向の柱間は多少ばらつきはあるが、3.1m間隔である。柱痕跡の径は20～30cmで、中央の柱が特に大きいとか深いという傾向はない。

建物は棚に沿う建物5棟とその南側30mにあって建物方向が異なる2棟がある。建物はいずれも3×3間の総柱建物である。棚に沿う建物SB-086～090は棚に接近して並んで配置され、棚との距離は約3m前後を測る。5棟全体を貫く柱筋は認められないが、SB-086と087が南側の桁行が、SB-088と087は北側の桁行が描う。また、棚とは建物の南北方向の柱筋のいずれか1つと列を描うという関係にある。各建物間の距離は柱の中心で西から約2.5m、4m、4.5m、5mとなる。建物規模は最大のSB-087で梁行長4.04～4.48m、桁行長6.2m、床面積約26m<sup>2</sup>を測る。最小のSB-089で梁行長3.50～3.74m、桁行長4.43～4.45m、床面積約16m<sup>2</sup>を測る。柱痕跡は径20～50

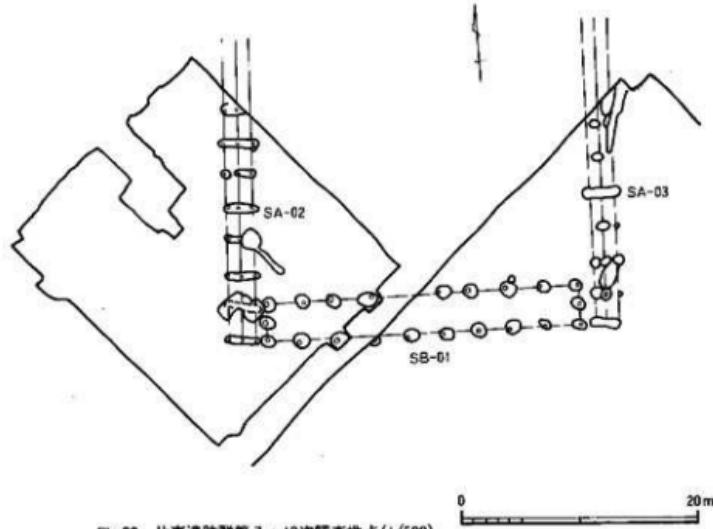


Fig.30 比恵遺跡群第7・13次調査地点(1/500)

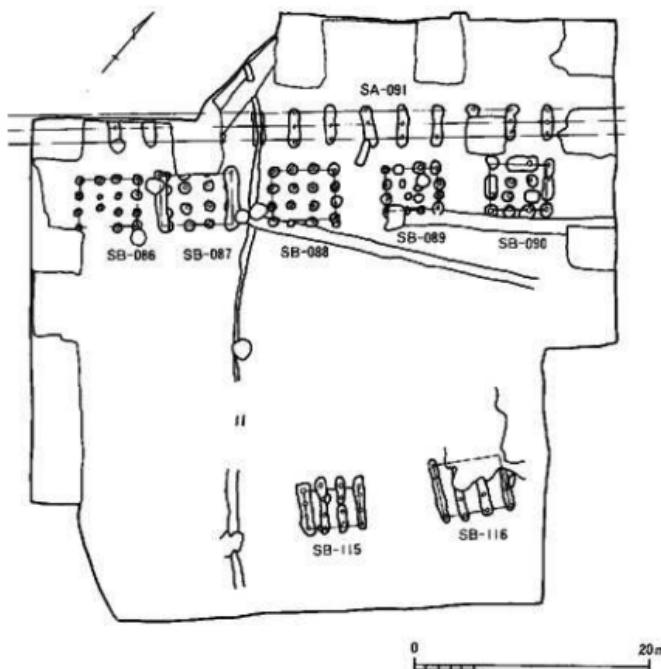


Fig.31 比恵遺跡群第8次調査地点(1/500)

cmを測る。建物は全体の建て替えは行われていないが、SB-087のみ掘り方が布掘りに掘りなおされており、部分的に建て替えが行われたと見られている。

南側にある建物SB-115、116は前者の建物とは方位を違え、西に若干振れる。建物は南北の柱筋が布掘りで、東西方向に並んで配置される。規模はSB-115は梁行長3.27～3.32m、桁行長4.72～4.85m、床面積約16m<sup>2</sup>を測る。SB-116は梁行長4.52m、桁行長5.75m、床面積約26m<sup>2</sup>を測る。2棟は先の5棟と時期的に接近するものと考えられている。

これらの棚、建物の時期は出土遺物、造構の切り合い等から6世紀後半から7世紀後半の幅の中で捉えられ、前述の第7・13次調査地点の建物、今回調査の建物とほぼ同時期に位置づけられる。ただ、両者の建物方位が大きく異なるが、これは立地する台地の地形に制約されたものと考えられる。

### 那珂遺跡群第18次調査 (Fig.32)

比恵遺跡群との境にあり、台地のほぼ中央に位置する。今回の調査地点から南東に約650mの距離にある。ここでは遺構は総柱建物3棟が検出された。

SB-11、12は南北方向に桁の柱筋を描えた建物で、3×4間の総柱建物である。建物方位は桁の方向でN-27°-Wをとる。SB-11は梁行長6.1~6.2m、床面積約31m<sup>2</sup>を測る。SB-12は梁行長4.67m、桁行長6.6m、床面積約31m<sup>2</sup>を測る。建物間の距離は約4mを測る。柱の掘り方は70cm前後で、柱痕跡の径は20cmを測る。SB-13はSB-12の東側にあり、1×3間分が検出されている。建物方位はN-27°-Wをとる。SB-13の南端の柱筋がSB-12の中央の東西方向の柱筋と一致する。柱間は梁行で1.5m、桁行で1.93mを測る。建物規模、方位は前2者と近く、建物は3×3間もしくは4間の総柱建物と想定される。

この調査区では建物を囲む構、溝などは確認できなかった。時期は良好な出土遺物が無いため、確定できないが、切り合ひ等から8世紀まで下るものではなく、遺構の下限は7世紀代におさまる。ここでの特徴は建物を南北方向に建物を配置することが上げられる。この調査地点から南西300mにある第21次調査地点でも7世紀前半に位置づけられる3×3間の総柱建物が桁行方向でN-16°-Wをとる南北棟である。関連が注目される。

### 那珂遺跡群第23次調査 (Fig.33)

遺跡群の南側にあり、那珂川から東に約200~300mに位置する。今回の調査地点からの距離は約1400mを測る。ここでは総柱建物3棟とそれを囲む溝3条が検出された。

SB-87、90、91は東西方向に柱筋を描えて連なる総柱建物で、建物方位は磁北から西に12°振れる。建物はいずれも3×4間で、SB-87は梁行長4.8m、桁行長6.3mを測る。他の2棟も同様の規模である。柱の掘り方は80~100cm程で、柱痕跡は20cm程である。各建物の間隔は2.6m、1.9mと狭く、桁を連ねた並び倉ではないかと推測されている。連ねた長さは約23mを測る。

SD-62は建物群の南に位置する。削平のため、西側は残っていないが、建物と同一方向をとる浅い溝で、幅約50mを測る。埋土からは7世紀後半の短脚の高杯が出土している。

SD-89は真北をとる大溝で、建物群の東に位置する。断面形は逆台形で、幅約2.1m、深さ約1.2m、延長34.5mを測る。建物群との距離は15mを測る。出土遺物には時期幅があるが、7世紀初頭から前半に位置づけられる。SD-89の西側には同一方位で南北に延びるSD-92がある。幅約50cm、SD-92との距離は約2mを測る。遺物は7世紀末までのものが出土している。

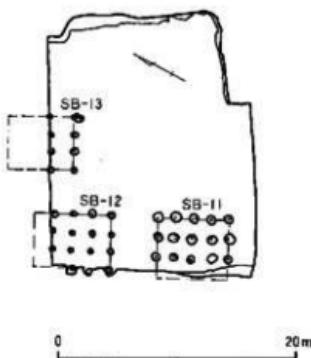


Fig.32 那珂遺跡群第18次調査地点(1/500)

SB-87, 90, 91は規模や構造から同一時期の建物と考えられ、柱穴の出土遺物から7世紀初頭～前半代に位置づけられる。建物は並び倉の可能性があり、これまで見てきたものは様相が異なる。建物群の周囲にある溝は時期、方位等で建物と多少相違が見られるが、同時併存の区画の溝と推定されている。

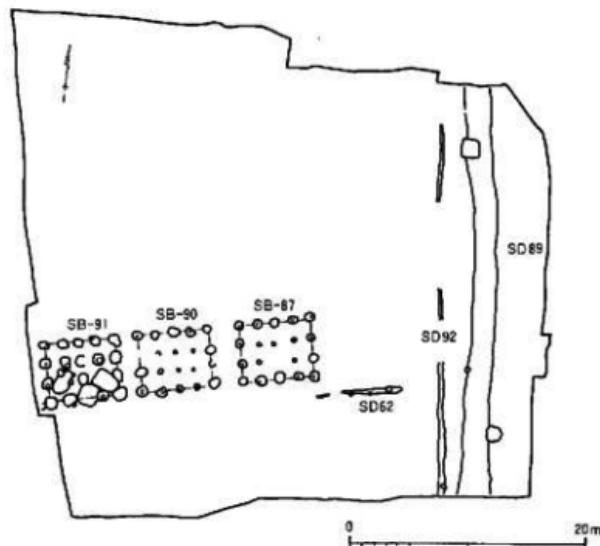


Fig.33 那河遺跡群第23次調査地点(1/500)

以上、那河、比恵遺跡群の古代の大型建物について概略を述べた。

これらを簡単にまとめると次のようになる。

時期的に見ると、これらの建物は下限は7世紀代でおさまるもので、8世紀まで下るものはない。しかし、比恵遺跡群の建物群はいずれも6世紀後半まで遡る可能性があり、これらの遺構の出現は比恵遺跡群の方が若干古いと考えられる。それぞれの建物は建て替え等ほとんど見られず、短期間の物であったと考えられる。各調査地点の建物を比べると、方位、規模、配列は類似点あるもののばらつきがあり、これらすべてに同一の企画性を見出すことはできない。地理的制約、時期的相違などがあるものと考えられる。3本1組の柵は今のところ那河遺跡群では見られず、類例として有田遺跡群にあるのみである。有田遺跡群では現在9地点で同様の遺構が検出されており、出現の時期も6世紀後半に遡ると考えられている。また、柵のコーナー一部分も検出され、柵に囲まれる範囲が分かるものも幾つか見られる。これらと関連が注目される。

大きな遺跡の推移を見ると、6～7世紀にかけて出現する官衙的遺構は7世紀を境に比恵遺跡群から那河遺跡群に次第に移っていくようである。また、この時期の住居も多く見られるようになり、集落も拡大する傾向にある。

## おわりに

近年、那珂、比恵遺跡群は調査例の増加に伴って、官衙的造構、関連遺物も増えつつある。それらを有機的に結びつけて考える詳細な検討が必要である。今後の課題としたい。なお、ここで使用した造構配置図は各報告書から再トレースしたものである。

最後になったが、今回の調査、整理にあたり、柳沢一男、山口謙治、下村智諾氏を中心として多くの方々にご教示をいただいた。感謝の意を表します。

## 注

- 1) 柳沢一男「福岡市比恵遺跡の官衙的建物群」『日本歴史 第465号』1987年
- 2) 山口謙治、吉留秀敏「比恵遺跡群(8)」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第174集』福岡市教育委員会 1988年
- 3) 柳沢一男、杉山富雄「比恵遺跡群 ー第8次調査概要ー」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第116集』福岡市教育委員会 1985年
- 4) 山口謙治、常松幹雄、佐藤一郎「那珂6ー第18・28・30・31次調査報告ー」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第292集』福岡市教育委員会 1992年
- 5) 下村智、荒牧宏之「那珂遺跡4ー那珂遺跡群第23次調査の報告その2ー」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第290集』福岡市教育委員会 1992年
- 6) 有田遺跡群の建物群については米倉秀紀氏にご教示いただいた  
有田遺跡群では今のところ、第6次、第35次、第46次、第101次、第102次、第105次、第107次、第158次で3本柱の樋が検出されている。詳細は各報告書を見て頂きたい。

# 図 版



第39次調査地点SA-015、SB-016、017(北から)



1. 第37次調査地点遠景(北から)



2. 第30次調査地点全景(北から)



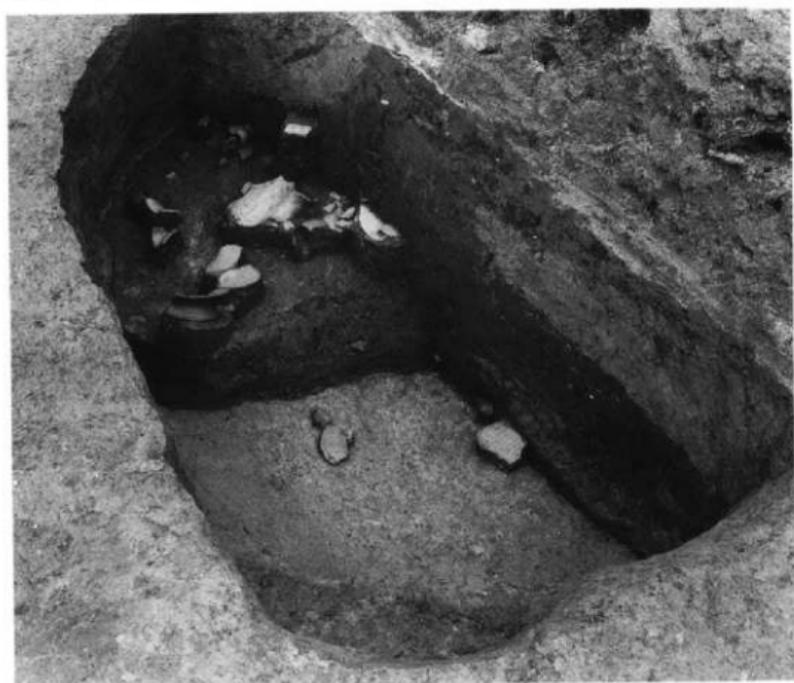
1. 第39次調査地点全景(北から)



2. 第39次調査地点全景(南から)



I. SU-037 完掘(東から)



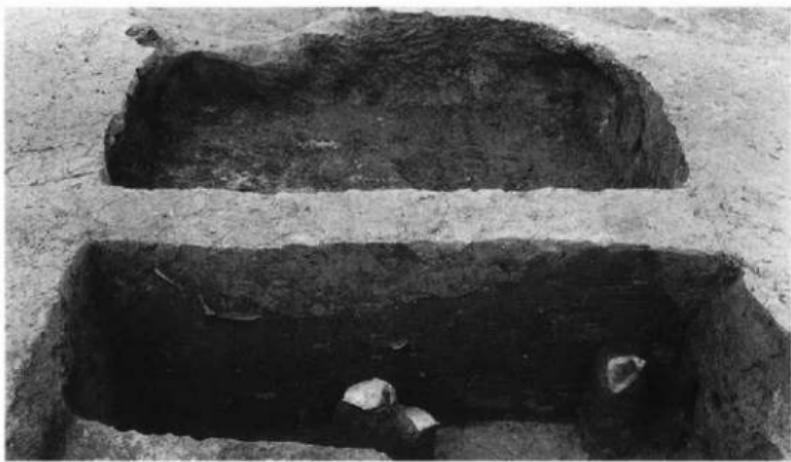
Z. SU-037 遺物出土状況(北から)



1. SU-038 土層(西から)



2. SU-038 完掘(北から)



1. SU-039 土層(西から)



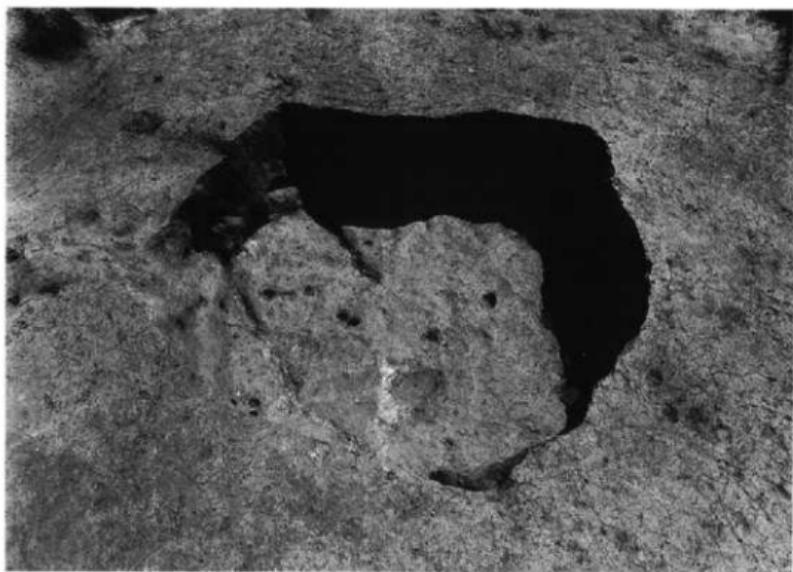
2. SU-039 遺物出土状況(南から)



1. SU-039 完掘(南から)



2. SU-040 土層(南から)



1. SU-040 完撮(南から)



2. SU-040 完撮(西から)



88



89

貯藏穴出土土器



99

90



103



100



104



133

蔚葦穴出土土器



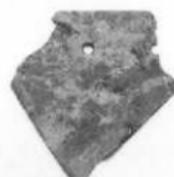
134



135



136



137



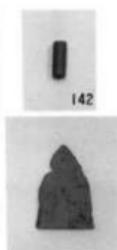
138



139



140



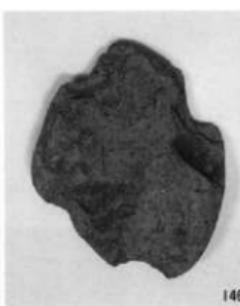
141



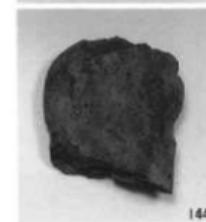
143



145



146



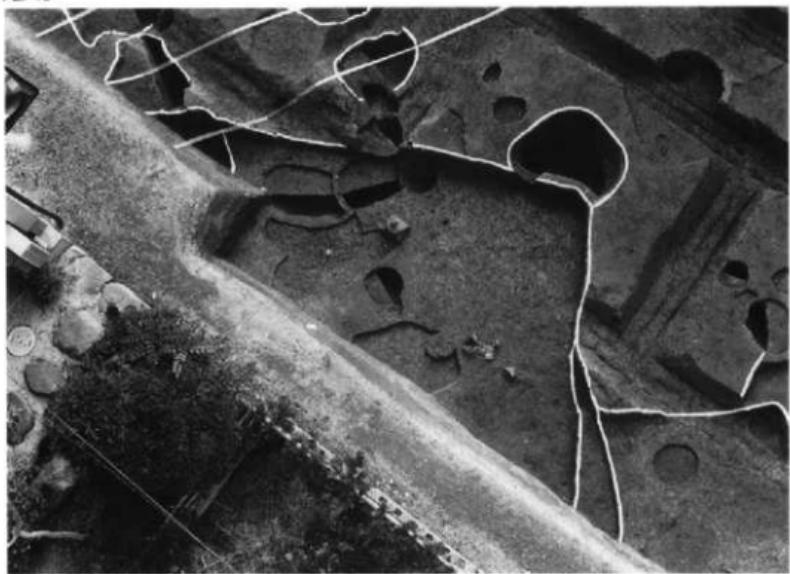
144



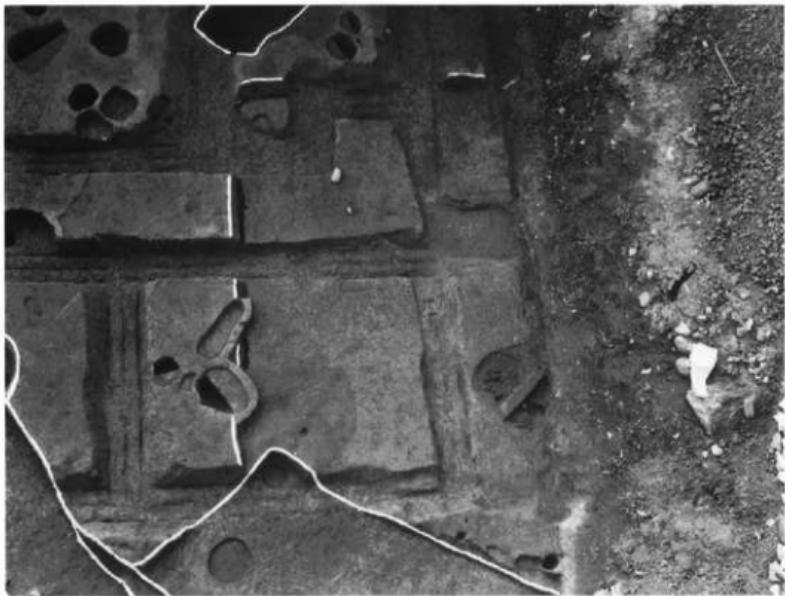
1. 第7・13次調査地点遠景(西から)



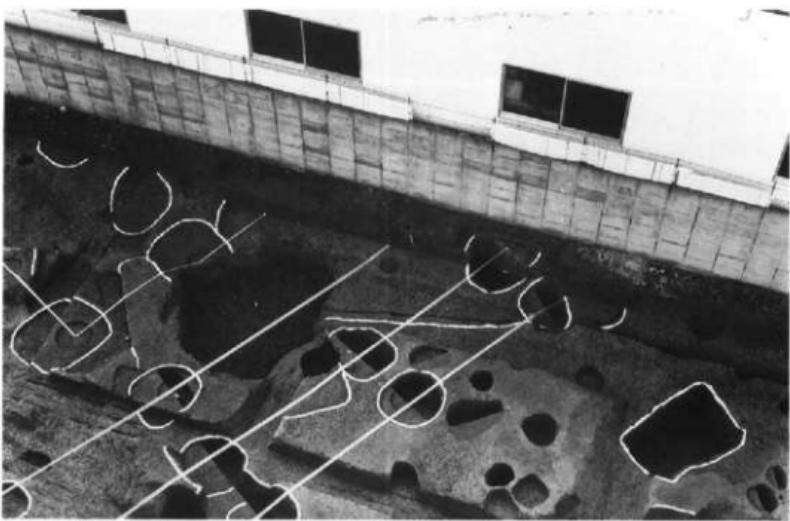
2. 第39次調査地点全景(北から)



1. SC-001、009 完攝(東から)



2. SC-002完攝(東から)



1. SC-003完掘(東から)



2. SC-008完掘(北から)



1. SC-006、007完掘(北から)



2. SK-004土層(西から)



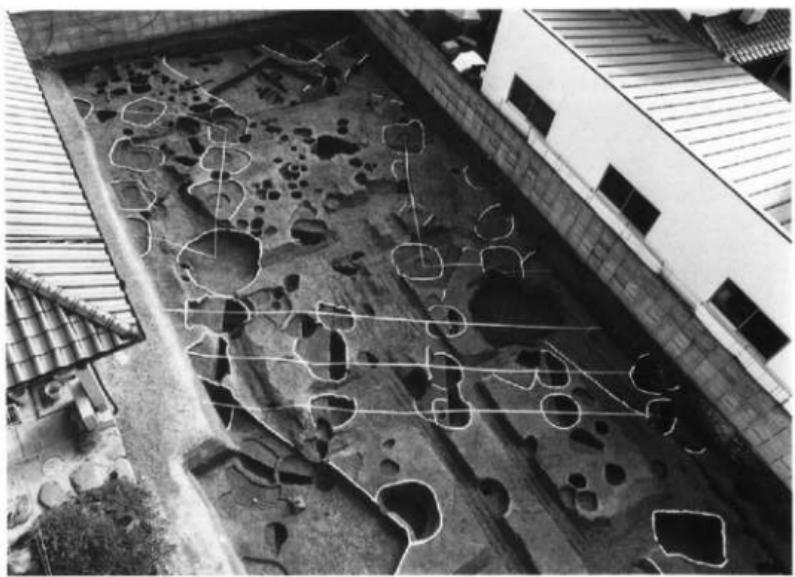
1. SK-004完掘(西から)



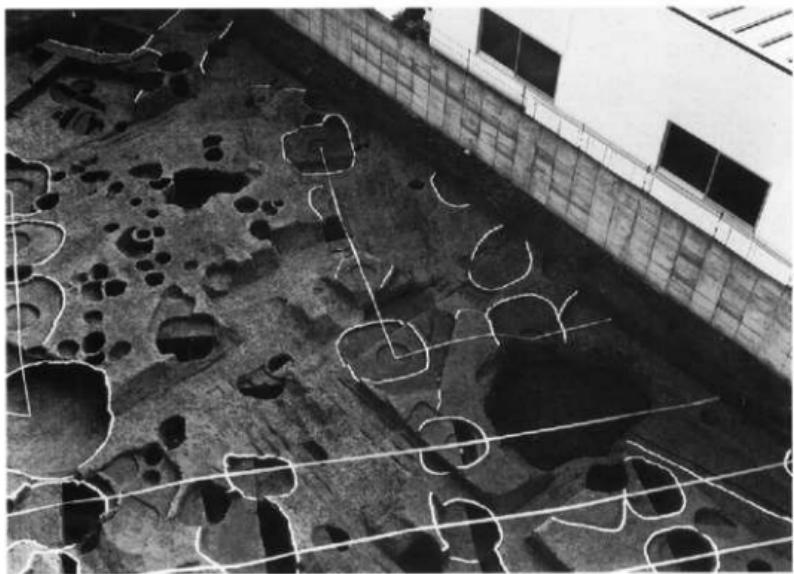
2. SK-012土層(東から)



1. SK-012発掘(東から)



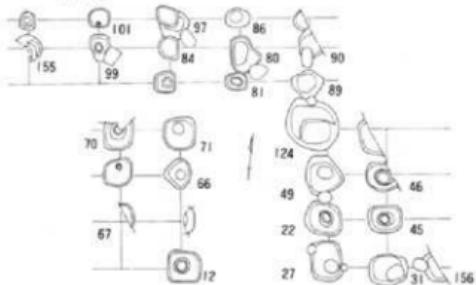
2. SA-015, SB-016, 017(北から)



1. SB-016(北から)



2. SB-017(北から)

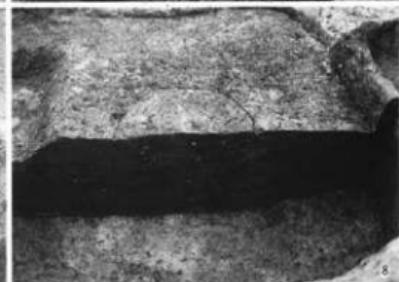
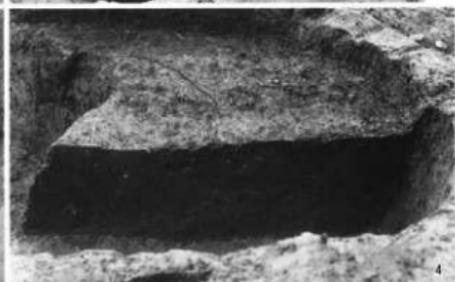
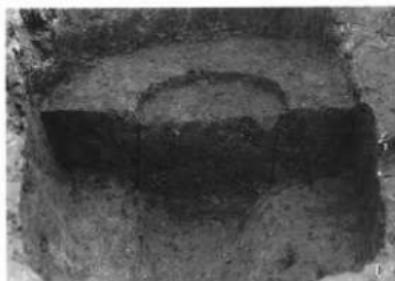


1. SA-015 SP-0155土層(東から) 2. SA-015 SP-0101土層(西から)

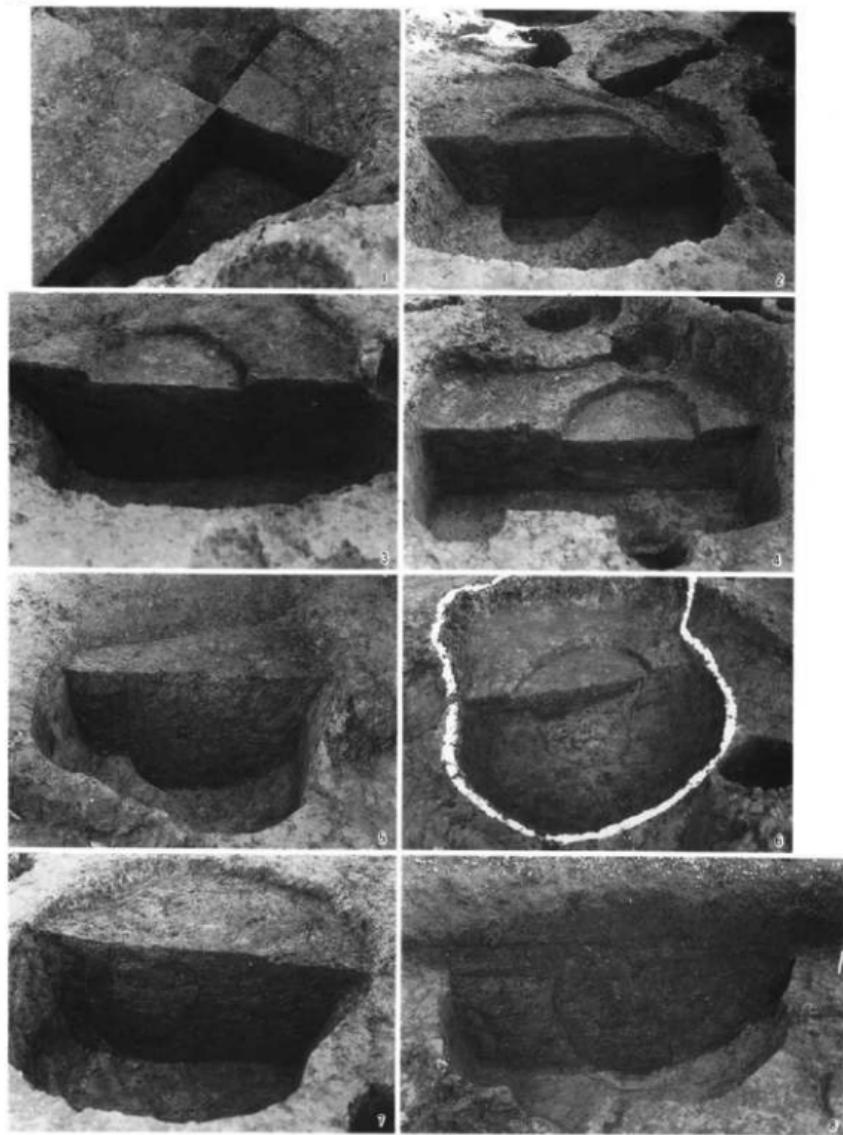
3. SA-015 SP-0099土層(西から) 4. SA-015 SP-0057土層(西から)

5. SA-015 SP-0084土層(西から) 6. SA-015 SP-0086土層(西から)

7. SA-015 SP-0080土層(西から)



1. SA-015 SP-0081土層(西から) 2. SA-015 SP-0090土層(西から)
3. SA-015 SP-0089土層(西から) 4. SB-016 SP-0070土層(西から)
5. SB-016 SP-0067土層(東から) 6. SB-016 SP-0071土層(東から)
7. SB-016 SP-0066土層(西から) 8. SB-016 SP-0012土層(東から)



1. SB-017 SP-0124土層(東から) 2. SB-017 SP-0045土層(西から)

3. SB-017 SP-0022土層(西から) 4. SB-017 SP-0027土層(西から)

5. SB-017 SP-0046土層(西から) 6. SB-017 SP-0045土層(西から)

7. SB-017 SP-0031土層(西から) 8. SB-017 SP-0156土層(西から)

---

福岡市埋蔵文化財調査報告書第325集

## 比恵遺跡群(12)

—比恵遺跡群第37・39次発掘調査報告書—

1993. 3. 15

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 株式会社西日本新聞印刷

福岡市中央区天神1丁目4-1

---